

# 持続可能な食と農・ エネルギー・教育を学ぶ ESDスタディツアー報告書

2012.8.15～8.24  
オーストラリア  
(アデレード・カンガルー島)

ESD Study Programme Report:  
Learning about  
Sustainable Food/Agriculture,  
Energy and Education  
in Kangaroo Island (2012)



# 持続可能な食と農・エネルギー・教育を 学ぶ ESD スタディーツアー報告書



## はじめに

カンガルー島でエコ・ハウスを営むティーズデイルご夫妻と「持続可能性」を学ぶスタディツアーについて構想を温めはじめたのは、東日本大震災が起きた年の暮れでした。その頃の日本社会は、震災および福島第一原子力発電所事故によって、エネルギーや食糧、ひいてはライフスタイル全般をめぐる混乱が続いていました。原発停止による電力不足や原発事故以後の食料の安全性確保など、政府も国民も右往左往していたと言えましょう。

そうした状況の中、教育現場も混乱の中にあったと言えます。くり返されるトップダウンの改革の結果、教育現場で世知辛さが増す中、教育という営みそのもののサステナビリティが問われているのが現況ではないでしょうか。確かに政府の教育振興基本計画には、「一人一人が地球上の資源・エネルギーの有限性や環境破壊、貧困問題等を自らの問題として認識し、将来にわたって安心して生活できる持続可能な社会の実現に向けて取り組むための教育（ESD）の重要性について広く啓発活動を行う」と明記されています。しかし、震災後、そもそもこの社会で持続させるべきものは何なのか、させるべきでないものは何なのか、これらの問いに社会全体でコンセンサスが取れていないまま、教師は教壇に立つことを求められているのが現実なのではないでしょうか。

そんな状況において、サステナビリティを多角的に学ぶスタディツアーが構想されるに至りました。その目的は、同学会のホームページ等で公募されたスタディツアーの概要に表わされているように、「手つかずの大自然の中で地球環境や自然と人間との関わりに想いを巡らす」と同時に、「島内のサステナブルな実践から 3.11 後の日本のライフスタイル・食農・エネルギー・教育について考えるヒントを得」ることです。

ツアーは、就学前教育から高等教育段階まで、会員の多くを教師が占める日本国際理解教育学会の全面的なご理解とご協力をいただき、開催実現にこぎ着けることが適いました。公募の結果、校長先生を含めた、全国各地からの 4 名の教員をはじめ、大学院生や学部生の若者も集まり、計 9 名の参加者となりました。

特に、震災を身をもって体験された仙台の多田智恵子先生のご尽力で、私たちのツアーは一方的にこちらが学ぶのみならず、震災時やその後の日本社会を伝えることによって、島民にも学んでいただける相互学習の機会となりました。このことは、ツアー全体をこの上なく豊かにしてくれたと言えます。この場を借りて、ツアーの実施中も惜しみなく報告の準備をしてくださった多田先生に心よりお礼を申し上げます。

今回のツアーの一つの特徴は、持続可能性とクオリティ・オブ・ライフは相反しないということ、また持続可能な社会にとってコミュニティの絆は何よりも大切であるということ、参加者の誰もが実感できたことであると思います。この他、このツアーを通して、参加者がどのように感じ、何を学びとったのかについては、本報告書の感想文



やアンケート結果をご覧くださいと思います。

持続可能性とは、とにかく抽象的に語られる概念ですが、今回の旅の参加者はそれを具体的な事例をもって語る可以说是できるでしょう。国連の前事務総長のコフィ・アナンは「今世紀の最大のチャレンジの一つは次の抽象的な概念、つまり『持続可能性』に取り組み、世界中の人々にとって現実のものとするこゝである」（ダッカでの講演）と語りましたが、具体的な実践例をもって、この難題を解決する可能性を示してくれたカンガルー島の自然と人々は文字どおり「偉大な教師」だったと言えます。この場を借りて、今回のツアーを心を込めて準備して下さったティーズデイルご夫妻、そして現地で心温まる歓待をして下さった島民の皆様に心よりお礼を申し上げます。

スタディーツアー・プログラム・コーディネーター  
聖心女子大学文学部教育学科准教授 永田佳之



## ●目次

---

|      |   |
|------|---|
| はじめに | 1 |
|------|---|

### ●第一部 スタディーツアーについて

|  |    |
|--|----|
| 1. Japanese Study Tour 2012 ツアーを振り返っての分析 | 7  |
| 2. スタディーツアー訪問国基礎情報                       | 9  |
| 3. 参加者リスト                                | 11 |
| 4. 日程                                    | 12 |
| 5. 感想文                                   | 15 |
| 6. 資料                                    | 49 |
| ●写真集                                     | 51 |
| ●事前勉強会資料                                 | 60 |
| ●スタディーツアーに関するアンケート集計結果                   | 67 |
| ●上を向いて歩こう ―日本のタベのテーマソング―                 | 72 |

### ●第二部 英文報告書

|  |     |
|--|-----|
| Forward  | 77  |
| 1. Japanese Study Tour 2012 Retrospective Analysis           | 79  |
| 2. List of Participants                                      | 81  |
| 3. List of Respective People and Collaborating Organizations | 82  |
| 4. Programme Schedule  | 83  |
| 5. Impressions and Comments                                  | 87  |
| 6. Questionnaire result                                      | 102 |



# ●第一部 スタディーツアーについて



# カンガルー島スタディーツアーを振り返って

ボブ・ティーズデイル  
ジェニー・ティーズデイル

## はじめに

日本の教育者ら 9 名によるカンガルー島でのスタディーツアーは、成功のうちに幕を閉じた。一行は期待を胸に島を訪れ、その期待を裏切らないほどの感動を胸に帰国の途についた。このツアーに関った島の人々も、一行の良い学びや応答に大変心打たれた。このレポートでは、活動を振り返り、この旅がなぜ成功したのかを明らかにした。

## ツアーが成功した 12 の理由

- 1 日本人参加者全員の熱意と事前の準備
- 2 永田佳之氏のリーダーシップは見聞が広く、思いやりがあり、賢明であった。彼は経験豊かな参加者に刺激を与え、若い参加者を支え、その幅広い年齢層を最適にまとめ上げた。
- 3 この異なった年齢層での経験は、どうやったら異なる者同士がその違いを尊重し合えるのかを明らかにした。そして同時に、両者の重要なつながりにも気付いた。
- 4 フィールドも理想的であった。カンガルー島は、環境における持続可能性を包含し、この重要な問題を観察し研究する機会を提供した。
- 5 宿泊施設：快適さ、立地、もてなしの心、そして予算、「オゾンホテル」は一行にとって理想的な場であった。
- 6 参加者同士が協力し合って考え、変化を遂げ、挑戦したことにより、持続可能な環境教育プログラムの成功はもたらされた。
- 7 前回のスタディーツアーの評価は、2012 年のプログラムの内容および運営を改善させ、発展することを可能にした。<sup>i</sup>
- 8 日本側リーダーの永田氏とオーストラリア側の主催者のティーズデイル一家は、長年にわたり相互の文化を尊重しつつ、親密な関係を築いた。この関係性に基づき、文化的に適切なプログラムが考案され、実行された。
- 9 カンガルー島のコミュニティは、プログラムのすべての面において協力的に関わり合い、教育交流にとって最も重要な前向きで積極的に他者を受け入れる環境を築いた。
- 10 映画鑑賞会、NRM 会議、エコハウスへの訪問、およびオゾンホテルでの最終日の夕食会など、地域の人々との身近な交流は、カンガルー島の人々及び日本人参加者



に忘れがたい敬意と親密な関係を作り上げた。

- 11 エコハウスでの自己と向き合う時間は、容易には忘れることの出来ない方法で、参加者を雄大な自然と彼ら自身の中に、深く引き込むことを可能にした。
- 12 日本からは時差が無いため、参加者が困難なくツアーを始めることに適しており、効率的であった。

## ツアーでの印象深かった経験

このプログラムに参加した日本からの参加者とすべてのカンガルー島の人々は、自分たちなりの最も印象深かった思い出を持っているだろう。しかしながら客観的に見ても、私たちは次に掲げる活動が特別忘れられないものであると信じている。

- 1 「オゾンホテル」での＜日本の夕べ＞では、スタディーツアーへの思いやりあふれる応答や、日本人参加者による驚くべき親切なもてなしがあった。
- 2 多田千恵子さんによる、職場である小学校での衝撃的な津波の経験を語ったプレゼンテーションには、とても心動かされた。
- 3 地元の Kangaroo Island Community Education (KICE) という学校訪問。学校コミュニティの開放感と熱意、彼らの ESD への理解の共有と、それに対する日本人参加者の応答。
- 4 日本人参加者の、言語、食べ物、習慣などの異文化を受け入れ奨励しようとする意欲。
- 5 海の環境、島の野生動物、空、天気、植生、石や川など、様々なレベルの自然との参加者のかかわり。

---

i 「前回のスタディーツアー評価」については、次の URL を参照

2008 年第二回オーストラリアカンガルー島スタディーツアー 報告書（和）

<http://www.u-sacred-heart.ac.jp/nagata/ESD/StudyTourJP2009.pdf>

2008 年第二回オーストラリアカンガルー島スタディーツアー 報告書（英）

<http://www.u-sacred-heart.ac.jp/nagata/ESD/StudyTour02.pdf>



## スタディーツアー訪問国基礎情報

＜オーストラリア連邦 Australia＞



- 1) 面積：769万 2,024 平方キロメートル（日本の約 20 倍）
- 2) 人口：約 2,262 万人（2011 年 6 月。豪州統計局）
- 3) 首都：キャンベラ
- 4) 民族：アングロサクソン系等欧州系人が中心
- 5) 公用語：英語
- 6) 宗教：キリスト教 64%、無宗教 19%（2006 年国勢調査）
- 7) 主要産業：流通、製造業、鉱業、金融・保険、建設、通信
- 8) 一人当たりの GDP：55,590 米ドル  
（2010 年、IMF World Economic Outlook 2011）
- 9) 略歴  
1770 年 英国人探検家クックが現在のシドニー郊外のボタニー湾に上陸、



## 英国領有宣言

1788 年 英国人フィリップ海軍大佐一行、シドニー湾付近に入植開始、  
初代総督就任

1901 年 豪州連邦成立（六つの英国植民地が憲法を制定。連邦制を採用）  
（現在 6 州 2 特別地域）

1942 年 英国のウェストミンスター法受諾（英国議会から独立した立法機能取得）

1975 年 連邦最高裁の英国枢密院への上訴権を放棄

1986 年 オーストラリア法制定（州最高裁の上訴権を放棄する等英国からの  
司法上の完全独立を獲得）

## 10) 日本との関係

- 日本と 109 都市（内、6 州）が姉妹州（都市）関係にある。

（2012 年 3 月時点。自治体国際化協会 HP より）

- 2006 年は日豪友好協力基本条約署名 30 周年等にあたり、日豪交流年として  
両国の間の交流を一層拡大するための様々な催しが行われた。

- 在留邦人数：70,856 名（2010 年 10 月 1 日現在、平成 23 年度海外在留邦人数  
統計）
- 在日豪州人数：9,756 名（外国人登録者数）（2010 年 12 月末日、2011 年法務  
省登録外国人統計）

【参考URL】 オーストラリア政府観光局 <http://www.australia.com/jp/about.aspx>  
外務省 <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/australia/data.html>





## 参加者リスト

|       |  |
|-------|--|
| 永田佳之  | 聖心女子大学文学部教育学科准教授<br>Email: yoshy@pobox.com                           |
| 宇土泰寛  | 梶山女学園大学 教育学部 教授<br>梶山女学園大学附属小学校 校長<br>Email: uto@sugiyama-u.ac.jp    |
| 松井克行  | 大阪府立旭高等学校教諭<br>Email: k-matsui@asahi.osaka-c.ed.jp                   |
| 多田智恵子 | 仙台市立将監中央小学校教諭<br>Email: chieko-t@d4.dion.ne.jp                       |
| 高木佳祐  | 中央大学 総合政策研究科総合政策専攻<br>博士前期課程 2 年<br>Email: tkgksk21@gmail.com        |
| 辻本由比  | 聖心女子大学大学院 人間科学専攻<br>教育研究領域 博士課程前期 1 年<br>Email: ameakari@mo.petit.cc |
| 大場夏実  | 聖心女子大学文学部英語英文学科 2 年<br>Email: dkdmi723@gmail.com                     |
| 許田結莉  | 聖心女子大学文学部英語英文学科 2 年<br>Email: kyuyun723@gmail.com                    |
| 藤本恵実  | 聖心女子大学文学部教育学科教育学 2 年<br>Email: emi19920406@yahoo.co.jp               |



## 日程

| 日にち                     | 時間  | 活動内容   |
|-------------------------|---|--|
| 1 日目<br>2012 年 8 月 15 日 | 10:30<br><br>16:45<br>22:20   | 成田発<br>マレーシア航空：MH0089<br>クアラルンプール着<br>クアラルンプール発<br>マレーシア航空：MH0139  |
| 2 日目<br>2012 年 8 月 16 日 | 9:10<br>10:00~12:30<br>12:30~14:00<br>14:00~16:00<br>17:25<br>18:00   | アデレード国際空港着<br>移民博物館、アデレード大学見学<br>昼食、市内観光<br>National Art Gallery 見学<br>アデレード発<br>キングスコート着 Aurora Ozone Hotel へ     |
| 3 日目<br>2012 年 8 月 17 日 | 8:30~11:00<br><br>11:00~11:45<br>11:45~12:30<br>12:30~13:15<br>13:15~14:25<br>14:25~17:30<br>19:00~21:00<br>21:15~22:00 | 自然資源マネジメント委員会主催のサステイナビリティ会議に参加<br>休憩<br>プレゼン<br>昼食<br>プレゼン<br>海と山に分かれ、バスツアーに参加<br>夕食<br>振り返り                       |
| 4 日目<br>2012 年 8 月 18 日 | 9:30<br><br>10:15<br>11:00<br>11:30<br>11:45~12:30<br>12:30~13:30   | バスで Teasdale ご夫妻宅のあるペリカンラグーンへ<br>途中、Prospect Hill へ<br>Teasdale ご夫妻宅到着<br>プログラムの説明<br>エコハウスの説明<br>オーストラリアン BBQ ランチ |



|                   |   |   |
|-------------------|---|---|
|                   | 13:30~15:00<br>15:00~16:30<br>16:30~17:45<br>18:00~20:00<br>20:00~  | Teasdale 家とその周辺の散策、持続可能性についての講演<br>質問・振り返り<br>キングスコートへ移動<br>夕食<br>振り返り  |
| 5日目<br>2012年8月19日 | 9:00~10:30<br>11:00~12:15<br>12:30~12:45<br>13:30~14:00<br>14:30~17:00<br>17:00~<br>18:00~20:00<br>20:00~ | バスで Hanson Bay Koala Sanctuary へ<br>Flinders Chase National Park の散策<br>昼食<br>Remarkable Rocks 見学<br>Admiral's Arch and Seal Bay 見学<br>ホテルへ<br>夕食<br>振り返り                                     |
| 6日目<br>2012年8月20日 | 9:30~12:00<br><br>12:00~15:00<br>15:45~17:00<br>17:00~<br>18:00~20:00<br><br>20:00~                       | バスで Kingscote School Campus へ<br>先生方や生徒さんと交流後、お昼を購入し、次の Parndana School Campus へ<br>Parndana School Campus で学校見学<br>ワイナリー見学<br>ホテルへ<br>Maxwell ご夫妻宅にて夕食<br>Storm Boy (オーストラリア映画) の鑑賞会<br>振り返り |
| 7日目<br>2012年8月21日 | 9:00~12:30<br>12:30~13:30<br>13:30~14:30<br><br>14:30~15:30<br>15:30~16:45<br>16:45                       | 船上からのイルカ観察<br>ホテルにて昼食<br>KICE Performing Arts Center で生徒さんによる劇の見学<br>Canola farm へ<br>Kangaroo Island Pure Grains へ<br>ホテルへ   |



|                    |  |   |
|--------------------|--|---|
|                    | 18:00~20:00<br>20:00~                                      | 夕食<br>振り返り  |
| 8日目<br>2012年8月22日  | 午前中<br>14:00~15:00<br>15:00~16:00<br>16:00~17:00<br>18:30~ | キングスコート周辺の観光<br>Kangaroo Island seed and Plant Nursery を<br>見学<br>State Emergency Services と Country Fire<br>Service を見学<br>Fine Art Kangaroo Island の見学<br>発表会・島の人々との交流(日本のタベ) |
| 9日目<br>2012年8月23日  | 9:30~<br>10:30<br>11:05<br>14:30<br><br>20:45<br>23:30     | キングスコート空港へ<br>キングスコート発<br>アデレード着<br>アデレード発<br>マレーシア航空：MH0138<br>クアラルンプール着<br>クアラルンプール発<br>マレーシア航空：MH0088  |
| 10日目<br>2012年8月24日 | 7:40   | 成田着   |



## ●感想文

---

●「カンガルー島がつなぐ日本・オーストラリア・フランス・ブルキナファソ」  
梶山女学園大学 教育学部/教授梶山女学園大学附属小学校 校長 宇土泰寛

●「持続可能性（サステナビリティ）を学ぶカンガルー島 スタディーツアー(2012)報告」  
大阪府立旭高等学校教諭 松井克行

●すべては「つながり」の中に  
多田智恵子 仙台市立将監中央小学校教諭

●サステナビリティに出会う旅、「始まり」の旅。  
中央大学 総合政策研究科総合政策専攻 博士前期課程 2 年 高木佳祐

●学びのかがり火  
聖心女子大学大学院 人間科学専攻 博士課程前期 1 年 辻本由比

●自然と共に生きる素晴らしさ  
大場夏美 聖心女子大学文学部英文学科 2 年

●カンガルー島が与えてくれたもの  
許田結莉 聖心女子大学文学部英文学科 2 年

●計れない時間の中で学ぶ  
藤本恵実 聖心女子大学文学部教育学科 2 年



## 「カンガルー島がつなぐ日本・オーストラリア・

## フランス・ブルキナファソ」



梶山女学園大学教育学部 教授  
梶山女学園大学附属小学校校長  
宇土泰寛

国際理解教育学会が企画したESDのカンガルー島のスタディーツアーに、ちょうどカンファレンスの開かれた1日だけでしたが、参加させていただき、たいへん有意義なものになりました。8月から11月にかけて、日本の熊野、オーストラリアのパース、フランスのパリ、西アフリカにあるブルキナファソのワガドゥグーを訪問し、それぞれの都市から300km～400km離れた郊外の農業地帯と水事情を調べたわけですが、この4つの地域における水問題や農業の抱える問題をつなげる核心がカンガルー島にあったのです。

日本、オーストラリア、ブルキナファソ、そして、フランス、つまり、アジア・オセアニア・アフリカ・ヨーロッパの4大陸をつなぐ核心部分にカンガルー島があったのです。

まず、この4つの国や地域がどうして出てきたのか、私が大学との兼任で務める梶山女学園大学附属小学校のESDへの取り組みを簡単に紹介したいと思います。

附属小学校では、ESD（持続発展教育）を展開しています。その発端になったのが、東山動物園と連携した絶滅危惧種に指定されている「名古屋メダカ」の保存と子どもたちによるメダカの棲んでいた里山の研究でした。この取り組みの中で、本校の学び合いのテーマ「水と生活」が生まれたのです。

この「水と生活」をテーマとして持つことによって、本校が10年間実施しているオーストラリアのパースホームステイも変わってきたのです。

このホームステイ・プログラムは、ファームステイから始まります。そこでは、家畜の世話だけではなく、ブッシュウォークも行います。パースの市内を流れるスワンリバーの上流にあたる牧場の近くを流れる川の様子、家畜の水飲み場のため池、雨水タンク、



小麦畑、牧場での植林、しかも、ユーカリの木など昔からオーストラリアにあった木を植え直していることなど、たくさんのことを学ぶことができました。さらに、この牧場まで来る間に、それまで緑色の綺麗な農場の一部が黒く染まっているところも見られました。牧場主の話によると、もっと奥に入るとさらに広くやられているとのことでした。

そこで、パースから 350km 離れた奥地にあるウェーブロックまで、片道 5 時間のツアーに参加したのです。ウェーブロックよりも、他のツアー客と違って、その途中の農場と塩害の実態を見ることが主な目的でした。すると地下水が染み出たり、湧きだしたりして一体が完全に緑が無くなり、荒れ地になっていました。綺麗な緑色の牧場や農場と極めて対比的な風景でした。そして、この西オーストラリア州の小麦は、日本の讃岐うどんに最も適しており、日本に輸出されるとのことだったのです。実際に、長い貨物列車にも出会い、ここから日本に出発するのだな。そして、パースのフリーマントルに泊まっていた船に積まれていくのだなと、讃岐うどんの旅の始まりを映像でも撮ることができました。

しかし、日本の子どもたちが、なんてことなくうどんをおいしいと食べ、日本には水問題がないと思っている現状を考えた時、日本と世界はつながり合い、パースの農民の苦労の中で、讃岐うどんを食べることができるのだと学ぶことが必要だなと痛切に感じました。

さらに、この内陸部は水が少なく、実はパースのダムから水を送水管で送り出していること、そして、この送水管建設には、たいへんなオーストラリアの人々の努力と悲劇があったことを、実際にダムを訪問し、その小さなお店の人との話の中で知りました。このお話は、日本の愛知用水や明治用水の話と通じるもので、ぜひ翻訳しなければならない、日本の子どもとオーストラリアの子どもたちが共有できる内容だと思いました。

では、なぜオーストラリアにおいて塩害の問題が発生しているのか。本校の子どもたちがファームステイで、ユーカリの木などを牧場に植林しているのか。この関わりが分からないままでは、オーストラリアの水問題は見えてこない。

このオーストラリアの水問題が、カンガルー島で解けてきたのです。パースで小学生のホームステイの引率、次は、シドニーで梶山女学園大学教育学部のシドニー研修の指導との間に挟まり、一泊だけの滞在のツアーに参加すべきか、悩んだのですが、やはり参加して良かったです。

何ととってもボブ先生にお会いできたこと、そして、午前中の多くのプロジェクトの発表、午後実際にカンガルー島で行われている活動や環境モニタリングが組み込まれたカンファランスだったのです。

この発表の中に、パースで問題とした課題への挑戦がなされていたのです。つまり、カンガルー島は、オーストラリアの抱える問題を島全体で解決のためのモデルを提供していたのです。さらに、ボブ先生の奥様が教師としてなさっている子どもたちの活動も発表され、地域の中での ESD の実践を見ることができました。



学会のツアーの皆さんとお別れし、一人でアデレードに帰り、シドニーに向かいました。そして、オーストラリアがヨーロッパからの移民の人々が中心になっている博物館の展示などを見て、このオーストラリアをヨーロッパの原風景のように変えていった歴史があるのではないかと考えたのです。しかし、この乾燥地帯のオーストラリアでは、今、地下水の塩分濃度の増加が大きな課題となっています。これがパースの郊外でみた風景なのだとわかったのです。だからこそ、農場で、ユーカリの木など原生林の再生がなされていたのです。

偶然はつながり合うもので、アデレードの空港で買ったサイエンスの雑誌に、乾燥地の植物を育てるプロジェクトが記載されていました。そして、その実験がなんとこの秋に訪問する予定であったブルキナファソで実施されているという記事だったのです。

この秋、アフリカのブルキナファソに行く途中、フランスのノルマンジーをこれまたツアーバスで走りました。パリから 360km の日帰りツアーです。ここでの緑色に包まれ、小さな三角屋根の農家が点在するフランスの農村をひたすら見ることができました。この風景こそオーストラリア移民の人々の心の中にあったのかもしれない。

緑に包まれたフランスの短い滞在から、いよいよサハラ砂漠を越えたブルキナファソへの調査旅行へと旅立ちました。ここでも、アフリカの赤茶けた大地の続くサヘル地帯を車でひた走り、ダムを見て、その途中に、日本の援助でできた井戸を見ました。ポンプから出てくる綺麗な水に喜びに満ちた笑顔をした子どもたちにも出会いました。しかし、さらに奥地に入り、ブルキナファソの北部の村の浅井戸の水を汲んでみました。子どもたちがいた深井戸の水とは全く違って、濁った水でした。この水でも飲まなければならない人たちがいるのです。しかし、ダムの下流では、なんと水田の風景が広がっていました。このダムを中心に、農民のグループ、漁民のグループ、ダムを維持するグループなど地域の人々と子どもたちも参加して、地域の持続的発展に向けて努力している人々にも出会うことができました。日本のかかしの話をしたら、同じように小鳥に困っているとのことでした。

日本、オーストラリア、フランス、ブルキナファソ、これらの大陸を越えた各地域は降水量も大きく違い、各地域ごとの水問題を抱えています。しかし、現在、この地球時代の私たちの生活は大陸を越えてつながり合っています。そして、今、自分の地域が良ければよいというのではなく、地域と同時に地球的視点から行動する人々の育成が教育にも求められていると思います。この夏から秋にかけての大陸を越えた旅は、E S D (持続発展教育) の実践的展開が本当に今求められていることを実感した旅になりました。

最後に、カンガルー島のスタディーツアーを企画していただき、短期滞在にも関わらず、参加させていただいた永田先生、メンバーのみなさん、ボブ先生に感謝します。



## 「持続可能性（サステナビリティ）を学ぶカンガルー島

### スタディーツアー(2012)報告」



大阪府立旭高等学校教諭／佛教大学非常勤講師 松井克行

2012年8月16日（木）朝、アデレード到着。空港から路線バスで市中心部へ。アデレードの第一印象は、広大なオーストラリアに似合わず中心市街地が「コンパクト・シティ」という点である。その先見性は、南オーストラリア初代測量局長官ウィリアム・ライト大佐の都市計画（1836年）に基づく。最近、日本でも「まちづくり」の観点から「コンパクト・シティ」の有用性が指摘されている。地方都市の多くで中心市街地の衰退と郊外への都市機能の移転が深刻化しているからである。モータリゼーションの進展の中、「徒歩」から「クルマ」依存社会へのライフスタイルの変化は、超高齢社会（高齢人口比率が21%超の社会）と少子化の急進の中、持続可能性の観点から深刻な問題を引き起こしている。もはや「クルマ」を運転できない高齢者にとって日常の買い物や通院までもが持続困難である。しかも地方財政危機の中、バス路線などの公共交通の廃止が相次ぎ、移動困難な高齢者の孤立が顕在化している。

市中心部のアーケード内のカフェで、やや遅めの朝食をとった後、アデレード大学の米山尚子先生（人文社会科学部社会科学学科アジア研究所上級講師）の案内で、まず「南オーストラリア移民博物館（South Australian Migration Museum）」を訪問した。かつて移民の仮収容所だった建物が利用され、移民の「差別から受容の歴史」がコンパクトかつ視覚的に展示されていた。また、見学者がハンドルを廻すなどの操作をすることで展示品が見られるなど、様々な展示上の工夫が効果的であった。その後、米山先生の案内で、アデレード大学の図書館や、学生の自習棟として新設された「ハブセンター（Hub Centre）」を見学した。特に、「ハブセンター」の「学術的な学習と語学（Academic Learning and Language）」のコーナーが印象的であった。そこは「数学学習センター（Maths Learning Centre）」と「書き方センター（Writing Centre）」に分かれており、



数学の学び直し(例：三角関数) や、留学生等を対象とした、英語で論文を書く技能の育成〔例：「要約の書き方(Writing an Abstract)」〕等が目指され、講師役の大学院生が日中は常駐している。また、A3版2つ折で4ページの小冊子がいくつも置いてあり、それを読むことで自学自習も可能である。学習方法に関する冊子を数冊持ち帰った。「問題解決(Solving Problems)」、「Group Work」、「Mind Mapping」等の他、「時間の管理術(Managing Your Time)」もあり興味深い。日本の大学や高校にも是非欲しい施設である。

昼食後、「南オーストラリア美術館(Art Gallery of South Australia)」等を見学した。オーストラリアでは、美術館等の公的施設は全て無料！。日本も是非見習いたい。先住民アボリジニのアート作品の展示もあり、大変見ごたえがあった。夕刻、空路約30分でカンガルー島へ。風雨がきつかった。



8月17日(金)、宿泊先のホテルで開かれた「カンガルー島天然資源管理委員会(KINFRMB)年次大会」(初日)に参加。島民たちの環境保護意識と知識の高さに驚かされた。午後、バスでフィールドワークに参加。カンガルー島は、東京都の約2倍の大きさで、オーストラリア本土から離れ、開発や外来種による影響もほとんどなく、独自の貴重な動植物の宝庫である。豊かで美しい自然が魅力で、「フリンドース・チェイス国立公園」と23の自然保護区が点在。約890種の固有植物が生息している。特に、世界最古のミツバチ保護区と蜂蜜が有名である。1881年、イタリアからリグリア蜂が輸入されたが、現在カンガルー島にしか純種は残っていない。人口は4,259人(2006年)と少ない。

カンガルー島での先進的な持続可能性の取組みを学ぶのが本ツアーの趣旨であり、島民たちによる天然資源管理の取組みの報告とフィールドワークへの参加は、非常に有意義であった。筆者は、「海岸の水源をめぐるツアー(Catchment to Coast)」に参加。海岸に注ぐ川の数ヶ所に設置された水質検査装置を視察し、河川水に含まれるリンや窒素の測定の様子を見たり、土手の草地での外来種に替わり固有種の草木を復活させるための植林活動等を見学した。最も印象的であったのが、参加した島民たちの意識や知識の高度さと、自分たちの島の自然環境を改善していこうとする意識の高さである。報告の中に島の学校の子どもたちのものもあり、子どもから大人までのあらゆる世代を巻き込み、島ぐるみで生態系の「多様性(diversity)」の観点から、動植物や虫、水等の生態系と、農場や住民のライフスタイルとの共生のバランスを図っているのである。フィールドワークの中で驚いたのが、カンガルー島やアデレードでは降水量が少ないため、各家庭に雨水を貯めておくタンクがあり、人々が雨水を直接、飲料水としていることである。ほのかに甘みがあり、おいしいそうである。



8月18日(土), ボブ・ティーズデイル(G.R. Bob Teasdale)博士と妻のジェニー(J.I. Jennie Teasdale)御夫妻が暮らす「エコ・ハウス」(以下, 「ハウス」と表現する)を訪問した。「ハウス」は持続可能性の「具体」であり, 夫妻のライフスタイルが持続可能性を「体現」している。「ハウス」は50万豪ドル(約4700万円)で, ラトビア出身でアデレード在住のエコ建築家



Emilis Prelgauskas 氏の設計による。周りの自然の風景に同化するように, 周囲の岩や砂と調和した白い壁と, 自然の植物と調和したモスグリーンの屋根により, 目立たないが上品なコンセプトでまとめられている。母屋は天井が高く, 内海のペリカン・ラグーンに面した側(北面)の窓が大きく日光を多く取り入れられるため, リビング・ルームは, 冬でも暖かく, 明るく, 心地よい。他方, 丘側(南面)は, 1mほど掘り込んだ半地下構造である。夏の摂氏40度超の暑さと日光, 冬の厳しい寒さと強風を上手くやり過ごすためである。リビング・ルームの北面には小さいが重厚な黒い鉄製の暖炉があり, 家全体を暖めている。天井には空気の対流を促すための大きなファンが据え付けてある。建物は, 南北に短く東西に長い長方形の形状であり, アルプス等の山小屋と似た外観である(よりハイテク面で進化しているが)。屋根には太陽光発電のためのソーラーパネルがある。母屋の西側の別棟には「物置」がある。「D. I. Y」の工具が収められているだけではなく, 予備電源用の発電機(年間5~6日使用)と, 太陽光発電で得た電力を貯めておく蓄電池(少なくとも自動車用バッテリーのような電池が $6 \times 4 = 24$ 個)が置かれている。だが, オール電化ではなく料理用のコンロには天然ガス(屋外のガスボンベの形状より, 液化天然ガスではなく液化石油ガスすなわちプロパンガスと思われる)を使用。さらに「ハウス」には, 雨水を貯めておく「水タンク」(2万2千リットル)4つと, 庭用の水を貯める5千リットル容量の「水タンク」がある。注目すべきは, その位置であり, 「ハウス」の南側に2個, 東側に2個, 「ハウス」を囲むように設置されている。夏の東日(南半球ゆえ午後の東日が強い)の暑さと, 冬の南風の寒さから「ハウス」を防御するのである。

「ハウス」の見学とボブ博士の説明の後, 念願の昼食。カンガルー肉のバーベキューと, 妻のジェニー氏手作りのマフィンが絶品であった。食べ残しは, ニワトリたちの餌の他, 自宅の「コンポスト」で堆肥とされ家庭菜園で活用される。一方, 毎朝産まれるニワトリの卵は料理に使われる。昼食後, ボブ博士と, 「ハウス」の広大な庭を散策した。私有地は広く, ペリカン等の海鳥が多い海岸から固有種のやや小柄のカンガルーが暮らす丘までゆっくり歩いて数時間かかる。ボブ博士は, 歩きながら, 外来種の雑草を引き抜くよう参加者に指示した。その代わりに固有種を植えているという。固有種の苗を植えた周りは金網で囲んで保護する。数万本もの延々と続く地道な作業を続け, 敷地



内に固有種の森を再生させるという。数十年はかかるであろう長期のプロジェクトに黙々と取り組むことが、「持続可能性」にとって重要なのであろう。それは前日の島民たちのプロジェクトとも通底する信念である。

散歩の後、参加者各自が、「時計を持たず、外に出て、合図が鳴るまで、一人の時間を過ごす活動」を行った。筆者は、「ハウス」を見下ろす丘の上を目指した。夕方から夕暮れへ向かう時間帯、少し、肌寒いが、服を着込んだのでさほど気にはならない。この活動は、現代人が忘れかけている「自然との一体感」、「生態系とのつながり」を感じるための活動である。そして、生態系とのつながりは、一面的ではなく、相互関連的、全体論的（ホリスティック）であり、理性で考え、分析するだけではなく、感性で感じ、気づかなければならない。それは五感をフルに活性化することでもあり、匂いや音に敏感になることでもあり、自然と一体化するため、人間としての気配を消すことなのかもしれない。そんなことを、とりとめなく考えていた時、ふと目の前をカンガルーたちが次々と横切っていった。カメラを置いてきたため撮影できなかったが、それゆえ筆者の存在にカンガルーたちは気づかず、夕暮れの海へ向かってピョンピョンと駆け下りていく。草を食べながら、のんびりと互いに干渉せず、一定の間隔で…。思いがけず、至高の時を過ごすことができた。

帰りの車中（ボブ博士は、自らクルマを運転し、毎日、筆者たち送迎してくれた）で、ボブは、「持続可能性（サステナビリティ）は目標ではなくプロセスであり旅である。私たち夫妻は、まだサステナビリティの旅を続けている」と語った。持続可能性は長いプロセスという理解の重要性を実感した。

8月19日（日）は、「サステイナブル・ツーリズム」として、「フリンダース・チェイス国立公園」（リマーカーブル・ロックス、シール・ベイ）等を見学し、野生のアシカやオットセイを見た。自然環境を保全し、人間との接触を制限することで野生動物たちはリラックスできる。あどけない子アシカの、人間を恐れない仕草に、持続可能性と観光とのバランスを図ることの重要性を深く考えさせられた。

また、道すがらの車中から、時折、道路脇にカンガルーやワラビーの死体が見られた。交通事故による犠牲である。ボブ博士は、「カンガルー島の島民は、決してカンガルーやワラビーを轢き殺さない。観光客のクルマがスピードを出しすぎて轢き殺してしまう。」と語った。観光振興のためフェリーでのクルマの島への乗り入れは自由である。そのためには仕方ない犠牲なのか。どう考えても腑に落ちなかった。

帰路、さらに残念な光景に出会った。ボブ博士は、筆者たちに「NECの森(NEC Forest)」を見せてくれた。この森が孕む深刻な問題については、既に2009年2月12日に聖心女





子大学の永田佳之准教授と聖心女子大学生たちが報告書にまとめている ([http://www.accu.or.jp/jp/activity/person/data/2008\\_SEI\\_SHIN\\_esd.pdf](http://www.accu.or.jp/jp/activity/person/data/2008_SEI_SHIN_esd.pdf), pp.33-34,79-84, 2012. 10. 26 閲覧)。同報告書と永田准教授の話によれば、学生たちがNECに改善を求めたという。しかしながら2012年になっても何ら改善が見られないようである。事の次第は、2002年より、日本の電気メーカーNECが、製造過程で排出したCO<sub>2</sub>分を植林で置き換えようと、カンガルー島でユーカリの植林事業を開始したことに始まる。これは、「カーボン・オフセット」と呼ばれる、「企業の社会的責任(CSR: corporate social responsibility)」と持続可能性の観点から評価される事業である。同社のHPによれば、「適切な降雨量など樹木の良好な成長が見込めることから、この地域を選定」(<http://www.nec.co.jp/press/ja/1002/1602.html>, 2012年10月26日閲覧)し、「牧草地として開拓された領域にオーストラリア自生の樹種を植林することにより、森の再生を図ると同時にCO<sub>2</sub>の吸収効果を期待」(<http://www.keidanren.or.jp/kncf/kigyo/06580.html>, 2012年10月26日閲覧)と、説明している。しかし、残念なことに、植林されているユーカリは、カンガルー島に本来自生していた固有種ではなく、外来種(タスマニア島の固有種)の「ユーカリ・グロービュラス(*Eucalyptus globulus*)」なのである。「NECの森(NEC Forest)」の看板には、「2002年からNECは、この地域での植林を開始している。広大なNECの森の成長により、ユーカリ・グロービュラスと他の硬材(アカシアを指すと思われる)は、排出されたCO<sub>2</sub>を自然に吸収する(From 2002, NEC will begin afforestation in this area, growing an extensive “NEC Forest” of *Eucalyptus globulus* and other hardwood trees that will naturally absorb CO<sub>2</sub> emissions.)」と誇らしげに書かれている。だが、このタスマニア島原産の「ユーカリ・グロービュラス」は、早く成長するという長所の反面、固有種よりも根を深く張り周囲の水分を強烈に吸収するという短所がある。その結果、周囲の水源が枯渇し、広い範囲で動植物や生態系に悪影響を及ぼしているのである。この事業を開始する際、カンガルー島の住民や「カンガルー島天然資源管理委員会(KINFRMB)」との意思疎通を欠いたため、「オーストラリアのユーカリを植えるのだから問題ない」という誤った判断に至ったのであろう。さらに気になったのが、「NECの森」が、電流を流したフェンスによって囲まれていることと、フェンス越しに見える森の、規則正しく整然とユーカリが植林されている様が、かえって単一栽培(モノカルチャー)的で、生態系の多様性を無視した「死の森」のように見えたことである。フェンスの傍には、なぜか鳥の屍骸が横たわり、電流を流したフェンスによるものかどうか因果関係は定かではないが、実にショッキングであった。なぜ、森をフェンスで囲い込む必要があるのだろうか。「カーボン・オフセット」のために造られた人工の「森づくり」は、「生態系の破壊」となり、カンガルー島の生態系に深刻なダメージを与えているのである。さらに同社は、従業員とその家族を対象に、環境意識啓発活動の一環として、ここで植林体験活動を実施しているが(<http://www.keidanren.or.jp/kncf/kigyo/06580.html>, 2012年10月26日



閲覧), この深刻な事態に一刻も早く気づいて欲しいと思う。

「NECの森(NEC Forest)」の問題は、環境保護のために善かれと思って行っている活動が、事前の現地調査が不十分で現地の人々との意思疎通を欠いたため、反対の結果を引き起こしているという貴重な教訓を考えさせる点で、ESD(持続可能な開発のための教育)のよい教材になると思われる。そこで帰国後、勤務校の国際教養科3年対象の科目「時事問題」で、「N社の失敗」と題した授業を行った(2012年10月27日、出席生徒15名)。ワークシートの『N社の失敗』は、どういう点にあったか?という質問に対し、「カンガルー島にない種類の木が植えられている。動物が森に入れないように電線で囲んでいる。外来種の木を植えたことで、この森の周辺の環境が壊れた。電気の流れるフェンスを設置した結果、動物や虫が減った。地下水が減り、川が減った。」等と、生徒の1人が答えた。また、『N社の失敗』を成功に変えるには、どうすればよいか?について、「木を切り固有種を植える。いまあるユーカリを切ってギターを作る。加工して売る(ユーカリ油)。植林をやめさせる。柵をなくす。」といったユニークな意見も見られた。「感想・意見」では、「残念…。いいことをしようとしたのに…」というのが代表的意見であった。今後は、是非ともNECと連絡を取り、同社の環境保護活動の改善に協力し、その過程を学習していけたら、と考える次第である。

8月20日(月)は、「ESD: Education for Sustainable Development(持続可能な開発のための教育)」として、カンガルー島の学校「Kangaroo Island Community



Education(KICE)」のキングスコート・キャンパスを訪問した。小学校から高校までが1つの学校の中にある。日本と異なりずいぶん開放的である。島内の3つのキャンパスの校長であるイアン・ケント(Ian Kent)先生自ら校内を丁寧に案内して下さった。途中からは、10歳の可愛い児童2人が案内役に加わった。校地内に大きなコンポストが設置されており、学校内の全ての生ゴミは、当番の児童・生徒たちによって運

ばれる。最も小さな小学校の低学年の児童から、日常の学校生活の中で、生ゴミのリサイクルについて体験的に学習するのである。校地内の一画では、宗教科の女性教員が自主的に学校菜園を切り盛りし、コンポストで作られた堆肥を活用し、生徒たちと一緒に野菜を世話しておられた。おそらく日本の学校にコンポストを設置したら、その臭い対策が問題となるだろうが(生徒、教員、PTA、周辺地域の住民)、ここは大気が乾燥していることもあり(季節も冬)、ほとんど悪臭もなく、そのような問題は杞憂のようだった。学校の中に畑があり、児童・生徒たちが野菜作りに関わることは、情操面でもよい効果が得られるだろう。ミミズがたくさんいる肥えた土で取れた野菜は学校の食堂で昼食の一部に提供されるのだ。児童・生徒と教員と生態系との「関係性」と、生態系へ



の「ケア」を通じたりサイクルの仕組みが、この学校にはある。さらに連邦政府や州政府からの予算で太陽光発電やLED電灯の建設も行われている。オーストラリア政府の環境保護への取組みは日本よりも数段、積極的である。実は、オーストラリアでは、空き缶や空き缶の回収とデポジット制が完備しており、ペットボトルの空ボトルに至るまで10セントで引き取ってもらえる。しかも、その制度は20年程前に、政府が製造業者に対する訴訟に勝訴して樹立したという。

また各教室には電子黒板が当たり前のようにあり、11・12年（高校生段階）の生徒には、1人1台ノートパソコンが貸与される。日本は、オーストラリアに比べて、学校のIT化の点でずいぶん遅れているようである

（筆者が勤務している大阪府立高校の各教室に電子黒板はなく、パソコンやインターネットは、通常はいくつかの特別教室でしか利用できない。ただIT化の工事で、インターネット端末のみが各教室に設けられている。従って、ノートパソコンとLANケーブルを持参すれば、各教室でインターネットへの接続はできる。但し、教室全体で視聴するためには、さらにビデオ・プロジェクターも持参しなければならない。従って、通常の授業で、そんな面倒なことをする教員はいない）。



さらに、この学校の羨ましい所は、日本の学校のように時間に追われた感じやストレスを全く感じない点である。牧歌的かつ平和なのだ。教員たちがお茶を飲み、お菓子を食べながら談笑できる開放的な談話室があり、開放的な部屋でリラックスできる。こんな部屋も、素敵な時間も、いつのまにか日本の学校にはなくなってしまった。

今の日本の学校現場では、あらゆる管理が強化され、生徒も教員も時間に追われ余裕がなくなり思考停止状態に追い込まれている。特に教員には息つく暇もリラックスする余裕も与えられず、自由度の「枠組み」は、どんどん狭く「囲い込まれ」、余計なことを考えず、ただ上から与えられたスケジュールを効率的に淡々とこなして数値目標を達成することのみが求められている感すらある。筆者が勤める大阪府立高校でも、民間企業の経営手法を会得するためか「民間校長」もずいぶんと増え、コンピューター化により学校事務などの合理化が進んだが、これらは学校にプラスになっているのか。事務方の人員は減らされ、教員間の「横のつながり」や「学びあい」の機会も減った。ともかく教員は個人ごとに毎年、数値目標の設定が求められ、それに基づき業績が評価されるため、チームプレーは評価されにくい。高評価を叩き出すためには、時に、「他者の成果を自己の貢献」として横取りし、「他者のピンチを見殺し」し、「自己の失態の責任を他者に押し付ける」冷徹さ、狡猾さが求められる。また、生徒の悩み事に向き合い真摯に対応することよりも、進学向けの補習に精を出し、進学実績の数字を挙げたと報告する方が、目に見える数値としてアピールしやすい。そのため、従来型のヒューマニズム



あふれる「よい先生」が高評価を得られず短期間で学校を異動させられる反面、生徒を、自己の数値目標達成のための手段として扱い、自己の責任領域以外のことには無関心で、些細なことでも大きな業績に水増しできる文章力とアピール力を持つ「ずるい先生」の方が、学校に不可欠な好人材として居座るという好ましくない傾向すらある（校長自身も、毎年、自己の「評価育成シート」の記入と、教育委員会からの厳しい評価を受けるため、そのような傾向を咎めることはない。むしろアピール力を駆使する「ずるい校長」が出世するような状況下にあり、実直で謙虚な人間には務まらない？）。

さらに、一時、「ゆとり教育」なる言葉が流行ったが、教育現場では、必要不可欠な同僚との情報交換のための会話をする余裕もなくなり、生徒と放課後に語らう一時を惜しみ、「評価育成システム」なる能力給の評価のための実績作りの書類作りに追われている。各自が、とりあえず本年の目標を設定し、その目標の達成度で評価される。しかも数値目標が求められる。児童・生徒の発達や能力の伸長ぶりを客観的な数値目標で示すことの妥当性を問うことなく、いたずらに結果を急ぐため、学力テストの平均点や入試合格者数、遅刻者の減少といった数字ばかりが重要な要素となりつつある。学校予算もどんどん減らされ、「がんばった学校」だけに追加予算の配当が行われるようになりつつある。従って、他校とは違った「特色作り」の予算獲得と報告のための書類作りに追われている。仮に ESD を重視した「地球や生態系や児童・生徒にやさしい学校」をめざすプロジェクトを提案するなら、それが、いかに児童・生徒の学力向上と「いじめや不登校」の減少に貢献するか、文書で提案し、他校にない独自性と発展性を訴えなければならぬだろう。従って、この学校のように、教員がリラックスできるような開放的な部屋の建設を、ESD に不可欠な予算として請求し、たとえそれが実現したとしても、その部屋で談笑するような時間と余裕を持った教員がいない現状では、その部屋は物置と化してしまうだろう。

さらに、そのようなプロジェクトを提案する余裕すらないのが、今の現実である。各教員は、皆、多忙のため、何かトラブルが生じると、たちまち追い込まれてしまう。なんとかしようとする真面目な教員ほど精神的に壊れやすく職務を継続できなくなる。従って、筆者を含めて周りの教員も、下手に関わると自分自身も追い込まれてしまうため、「これは管理職の仕事だ、私の仕事ではない。」と意図的に見過ごすことが多い。そんな奇妙な状況が、最近の日本の学校現場の危機的な一面である。教員も生徒も保護者も他人と深い関係性を築く余裕すらないから、ちょっとしたトラブルが深刻化することが多い。

やはり「余裕、ゆとり、あそび」が重要なのだ。「あそび」の部分がなくなると、学校は「ぎすぎす」してしまう。例えば、日本の学校であれば、宗教科の教員が学校菜園を作りたい、と言っても、学校長の許可は容易にはおきない。校内の土地の目的外使用であるとして不許可となるかもしれない。とりあえず、学校菜園の目的・教育的意義・効果・予算について、書類を書いて提出することを求められ、提出しても、塩漬け状態で、数年



間、放置されるかもしれない。数年後、ようやく校長の許可がおりた時には、その教員は他校に転勤してもういない。そんな笑えない冗談みたいな話が最近増えている。

ところで、筆者の勤務校は、60年の歴史のある学校ゆえ、少しばかり「あそび」の要素が残存している。大阪市内の学校のわりには緑がある。なぜか、みかん、柿、キウイなどが校内に植えられており、毎年たわわに実をつける。古くからおられる教員が気を利かして、こっそり収穫して職員室の大机の上どっさり果実が盛られたダンボール箱が置かれる。柿やキウイは甘味がなく微妙だが、みかんは結構いける。これらの果樹に関し、府知事、教育委員会、校長等が、学校敷地の不正使用としてクレームを言ったり、果実の収穫を勤務時間内に行ってはならない、といった細かいチェックを入れることは、まだない。そこが救いで、教員にとって居心地のよい「すきま」となっている。カンガルー島の教員方やボブ博士は、「ESDにはリレーションシップ（関係性）と、ケアリング（世話をし、世話をされるという思いやりとふれあい）が重要」と語っていた。勤務校には、昔ながらの、似たような伝統が残っているのかもしれない。但し、例えば、校内のみかんを生徒が勝手にもいで食べた場合、生徒は窃盗として停学処分になるかもしれない。職員室にきた留学生の外国人生徒に気軽にみかんをあげたことは何度かあるが、本校生に対しては、「特定の生徒にだけみかんをあげる行為は、周りの教員から不公平と批判されるかもしれない。1000人を超える生徒全員に与えるほどみかんは多くない」等という愚かな考えから自主規制して、誰も生徒にみかんをあげられない、というのがESD的ではない日本の学校の現状である。「すきま」、「大らかさ」が、どんどん萎縮している。

午後は、同校のパンダナ(Parndana) キャンパスを訪問した。魚の「養殖センター(Aquaculture Skill Centre)」が印象的であった。同校では、学校教育として職業訓練(Te VAT: Technical Vocation and Training)を行っている。興味深かったのが養殖プールの魚の体長や体重を計測する際、化学的な薬品を用いずに丁子油(ちょうじゆ)で魚を眠らせることである。丁子油(ちょうじゆ)といえば香辛料のクローブを連想するが、丁子油にそのような効用があることと、天然素材を用いることの重要性(環境への配慮の重要性)に改めて気づかされた。



カンガルー島の学校「Kangaroo Island Community Education(KICE)」の訪問では、同校の抱える課題についても教えて頂いた。それは、卒業生の進路保障である。卒業生の30%が大学進学で70%が専門学校進学である。だが、島に卒業生を受け入れるだけの雇用がない。農業・水産業・観光業の雇用の受け皿は広き門ではない。それゆえ若者の多くが島を出るという。但し、日本ほどには過疎化が深刻化していないように思えた。島の「17歳～30歳」に該当する人口が少ないが、30歳以上の人口が増加するからである。カンガルー島は、約890種の固有植物が生息し、オーストラリア独自の貴重な動



植物の宝庫である。観光産業と環境保護とのバランスをとりながら雇用を創出していくことが肝要であるが、「言うは易し、行うは難し」問題なのであろう。

8月21日(火)、1日早く帰国する筆者にとってカンガルー島滞在最終日である。「海と陸におけるサスティナブル・イニシアティブ」と名付けられた、この日の予定は盛り沢山であった。まず、午前中は「イルカ・ウォッチング」である。その特徴は、単なる観光ではなくイルカの生態調査を兼ねている点にある。「クジラ&イルカ保護協会(WDCS: Whale and Dolphin Conservation Society)」の協力で2006年から始まったプロジェクトであり、参加者は、研究者の同乗の基、イルカたちの生態調査のため、一眼レフカメラを貸与され、記録を撮るため、遭遇したイルカたちを激写しなければならないのだ。プロの動物カメラマンになったような感じで、とにかく夢中でシャッターを押したが、決定的な瞬間を収めることはできなかった。だが、楽しかったし、イルカたちは、水上に跳び上がる等のサービスをしてくれた。筆者は鯨食文化を伝統的な日本文化として肯定的に捉える。この点で、おそらくガイドのオーストラリア人の方とは相容れないであろう。筆者にとっては、哺乳類としての牛や豚を食べながら、子牛や子豚を見て「かわいい」と思う感覚と同じなのだが、そんな抗弁に、やはり「シー・シェパード」等の活動家は納得しないだろう、等という事を船上で少し考えた。

午後は、カンガルー島の学校「Kangaroo Island Community Education(KICE)」のキングスコート・キャンパスを再訪した。オーストラリアにおける深刻な自然災害の1つである「山火事」をテーマにした高校生の演劇を鑑賞するためである。ボブ博士と妻のジェニーさんの娘アリスさん(Alice Teasdale)が科目「ドラマ」の教員として演劇の指導に関わっている。日本の高校では、演劇はクラブ活動や文化祭で行うのが通常である。演劇に興味を持った生徒は、高校卒業後、演劇関係の専門学校へ進学したり、大学進学後、演劇部や演劇団体等に所属するのが一般的である。オーストラリアでは、「芸術科」の一環として音楽科や美術科と同じようにドラマ科がある。芸術センターに、常設の小劇場が設置されており、施設面でも大変恵まれている。生徒たちが物おじせず、堂々と劇を演じたのが印象的だった。

その後、近くにある2つの農場を見学した。

1つ目は、個人経営の農場であり、日本へ、非遺伝子組み換え菜種を用いたキャノーラ油用の種(canola)を輸出している。2つ目は、

「KIPG (カンガルー・アイランド・ピュア・グレイン)」社であり、こちらは日本へ「非遺伝子組み換え」のキャノーラ油用の種を輸出する他、小麦、麦芽用大麦、燕麦、赤レンテ

イル、ヒマワリの種、アマの種を、日本の他、マレーシア、ミャンマー、香港、タイ、韓国に様々な種子や穀物を輸出している。日本では、福岡県の「平田産業(有)」が、





キャノーラ油用の種を原料として、「非遺伝子組み換え」菜種 100%の「純正キャノーラ油」を製造し、ネット宅配通販の「らでいっしゅローソン」や、首都圏を中心に1都9県130万世帯の組合員を擁する生協の宅配サービス「パルシステム (Pal System)」で販売している。

確かに「非遺伝子組み換え」であるが、100%オーガニックではない (organic, 「オーガニックは、化学農薬・化成肥料、そして環境ホルモンや遺伝子組み換え技術を避けて、自然のままの健全な食物連鎖を目指す」(<http://www.jona-japan.org/qa/>「日本オーガニック&ナチュラルフーズ協会 HP」2012/11/18 閲覧) と、「KIPG (カンガルー・アイランド・ピュア・グレイン)」社で伺った。その理由は、100%のオーガニックは可能だが経済性がないため、両者のバランスを図るのが重要という。「100%オーガニック (有機農産物) ではない」という言葉が気になったので、帰国後、調べてみると、日本では、「有機 JAS マーク」を付けた農産物だけが、「オーガニック」、「有機農産物」と名称表示できる。「有機 JAS マーク」は、化学肥料、化学合成農薬、土壌改良剤を使用せずに3年以上経った畑で栽培して収穫された農産物に対する認証制度で、農林水産大臣に登録した第三者機関 (登録認定機関) が、認定を行っている (「有機農産物の日本農林規格([http://www.maff.go.jp/j/jas/jas\\_kikaku/pdf/yuki\\_nosan\\_120328.pdf](http://www.maff.go.jp/j/jas/jas_kikaku/pdf/yuki_nosan_120328.pdf), 2012/11/18 閲覧)。だが、日本でも「有機 JAS マーク」の基準は厳格であるため、そこまで目指さず、「無農薬」や「減農薬」の表示をする農家が多かった。だが、表示についての基準がなかったため、農林水産省は2007年3月に「特別栽培農産物に係る表示ガイドライン」を改正し、「無農薬」という表現を禁止し「農薬：栽培期間中不使用」と改めること、「減農薬」という表現を禁止し、「節減対象農薬：栽培期間中不使用」と改めること等を指示している (農林水産省消費・安全局表示・規格課「特別栽培農産物に係る表示ガイドラインQ&A」平成20年6月, [http://www.maff.go.jp/j/jas/jas\\_kikaku/pdf/tokusai\\_qa.pdf](http://www.maff.go.jp/j/jas/jas_kikaku/pdf/tokusai_qa.pdf), 2012/11/18 閲覧)。

ところで、菜種油には、キャノーラ油のような高級食用菜種油から、自動車の「バイオ・ディーゼル燃料(BDF: Bio Diesel Fuel)」用として、日本では休耕田で植えるようなものまである。筆者は、以前に勤務していた大阪府立西淀川高校との関係で、「国連ESD (持続可能な開発のための教育の10年促進事業)」の「持続可能な交通まちづくり市民会議～みんなで考え・つながり・行動するために～ (地域の特徴：公害からの環境再生をめざす住工混在地域)」(2007～08年度)に参加していた (<https://www.env.go.jp/policy/edu/esd/activity/osaka/index.html>, 2012/11/18 閲覧)。環境省が、地域に根ざしたESDの「内容」と、教育活動を継続的に行う「しくみ」のモデルを示すことを目指した事業であり、西淀川での主要活動の1つが「菜の花プロジェクト」である (「西淀川菜の花プロジェクトブログ」(<http://nanohanany.blogspot.jp/>, 2012/11/18 参照)。地域のNGO/NPOの公益財団法人「公害地域再生センター (あおぞら財団)」を拠点に、地域の高校や中学校やガールスカウトの組織を連携した活動を展開している。同ブ



ログに、本年、毎日新聞の地方版で取り上げられた記事が紹介されていたので、以下、引用する。〔まなびやの宝：府立西淀川高校 菜の花プロジェクト／大阪〕（毎日新聞2012年6月2日地方版）」。資源循環の仕組み体験―大気汚染や水質汚濁など、かつて「日本の公害地域」と呼ばれた大阪市西淀川区。そんな区内にある府立西淀川高校（重田明彦校長）では、環境に対する意識を高めようと、07年度から「菜の花プロジェクト」を実施している。校内で菜の花を栽培し、地域から回収した廃食油でバイオディーゼル燃料（BDF）を作るなど、資源循環の仕組みを実体験を通して学んでいる。同校では公害訴訟を踏まえ、90年代から社会科で大気汚染を中心とした公害問題を学習してきた。それらをベースに、05年度からは3年生必修の独自科目「環境」を新設。区内の大気汚染状況を調べるマップ作り、西淀川公害病の患者からの聞き取りを通して自分の生き方を考える「私の環境宣言」作りなどを行っている。その中の一つとして生まれたのが、菜の花プロジェクトだ。「大気汚染で苦しんだ地域から明るいイメージを発信したい」。府教委からBDFの精製機や肥料の購入費などの助成を受け、校内の荒れ地を耕して菜の花栽培をスタート。廃食油からBDFを精製し、実際に発電機を動かして綿菓子を作るなど効果を体験してきた。現在はBDF精製はしていないが、地域と連携して廃食油を回収し、ハンドソープの原料などに充てている。08年には「授業以外でも活動したい」との声が上がり、同好会が発足。積極的に地域のイベントなどに参加して活動をPRしている。担当する辻幸二郎教諭は「自分自身が行動することで地域とつながり、社会とかかわることの大切さを学んでほしい」と期待している。【三上健太郎】（<http://aozora.or.jp/archives/10517>, 2012/11/18 参照）。

この大阪市西淀川区でのささやかな活動から、カンガルー島の「持続可能性」向上への提言が1つある。それは、自動車の低公害化である。電気自動車、ハイブリッド車、低公害のディーゼルなど日本、米国、西欧では、自動車産業が積極的に低公害化を進めている。だが、オーストラリアでは、そのような配慮が遅れているように感じた。現在、西淀川区では、廃食油の回収の仕組みを作り上げ、回収した廃油をBDFを精製する企業に引き取ってもらうシステムを構築している。カンガルー島でも、例えば、キングストンのホテルや食堂で使用した食用油の廃油を回収してBDFを精製し、島内を走る自動車や「イルカ・ウォッチング」で使う船の原料に活用できないだろうか。

以上、手短かにまとめようとした拙文が冗長となり、かつ締め切りを大幅に超過した点をお許し頂きたい。最後に、ボブ夫妻と娘のアリス氏（ティーズデイル家の皆様）、ツアーの計画・準備・引率・記録等の一切を取り仕切られた永田佳之博士（聖心女子大学文学部教育学科准教授）、同じ教員として実に多くを学ばせて頂いた多田智恵子先生（仙台市立将監中央小学校）、帰国後、写真データを送って頂く等、心温まる御配慮を頂いた辻本由比氏（聖心女子大学大学院文学部教育学研究科）、ESD等、新たな教育の可能性を追求される姿勢から多くを学ばせて頂いた高木佳祐氏（中央大学大学院総合政策研究科）、そして好奇心旺盛で、いつも元気を与えて下さった聖心女子大学の3名の学生の



皆様へ感謝申し上げる次第である。

〔参考 HP〕（本文中での記述以外）

「おいしさの向こう側（平田産業(有)）」

(<http://www.radishlawson.jp/ec/e/eOM00045/>) 2012/11/13 閲覧。

「圧搾一番しぼり菜種油物語」

(<http://www.palsystem-tokyo.coop/waiwai/2011.10-1.pdf>) 2012/11/13 閲覧。

「最優秀新興輸出企業賞を受賞 オーストラリアの KIPG 社／共同通信 PR ワイヤー」

(<http://prw.kyodonews.jp/opn/release/201010212414/>) 2012/11/13 閲覧。



## すべては「つながり」の中に



仙台市立将監中央小学校教諭 多田 智恵子

この夏、縁あってカンガルー島スタディ・ツアーに導かれた。持続可能性を学ぶことがこのタディ・ツアーの目的であったが、私にとっては、東日本大震災以降自分の中で大きな課題となっている「持続可能な生き方・働き方」を考える旅であった。旅では、たくさんの素敵な人々との出会いに恵まれ、新たに学んだこと、感動したことは数え切れないほどあったが、ここには最も印象的だったこと三つを取り上げて記し、お世話になった方々に感謝の気持ちを表したい。

### （１）島の持続可能な発展に向けての取り組み

約１週間にわたるカンガルー島滞在中は、様々なプログラムを通して、たくさんの住民と接する機会を得た。そこで、最も感銘を受けたのは、島の持続可能な発展という目標の下に立場の違いを超えて多くの住民が協働し合っていることであった。

カンガルー島には、イルカの泳ぐ青く透き通った海、アザラシが寝そべる海岸、ペリカンが飛び交う大空、野生のカンガルーやワラビーの走る野原、今や増えすぎて厄介者となったコアラの棲む森林など、魅力的な自然が豊かにある。この島にとって、自然を売りにした観光業は最大の資源である。反面、多くの観光客を呼び込むことは、島の環境保全にとって脅威にもなりかねない。その点、この島では、観光業と環境保全をうまく両立させていた。

国立公園やシールベイ、イルカ観察で出会ったスタッフからは、自然に対する愛情や畏敬の念を感じ取れた。彼らが提供する観光客と自然との距離のとり方は、我々日本人のそれとは全く異なっていた。自然に対して親和性を持ちながらも一定の距離を保ち、直接的に触れることはない。私は、動物園、水族館等が大好きであり、また学校で子供たちを引率して連れゆくことも多かったが、それまで全く気がつかなかった。自然の一部を切り取って都会の中に持ち込み、檻の中の動物を見て「自然に触れた」気になることが、何と不自然なことであるか。

今回は、島で２年に一度開かれるという持続可能性に関するセミナーに参加させてい



ただいた。学校での堆肥作りや雑草退治の実践、外来種の抑制や絶滅危惧種の保護など、島で行われている様々な実践が報告されていた。英語の問題で発表内容を十分に理解できたとは言えないが、実践されていることや議論されていることの質の高さは十分に伝わってきた。聞けば、島の人口は4千人ほどで、会議の参加者のほとんどが島民だという。参加者の年代は若者から年配まで幅広く、世代に拘わらず平らな関係で議論が行われていた。互いに刺激し合うことで、彼らの実践は、これからますます改善されてゆくのだろう。

日本の同規模のコミュニティで同じことができるだろうか？ この島では、島の持続可能な発展という一つの目標の下で人々が緩やかに結びつきながら（互いに締めつけ合うのではなく）、それぞれが専門性を磨くという点では緊張感をもっている。この適度な緩さと緊張感が、質の高い協働作業を長く続けていくときの鍵になるのではないか。これは日本の職場やコミュニティにも言えることなのではないか。会議の合間の和やかなティー・タイムの雰囲気から、そんなことを考えた。

## **（２）教育の豊かさ**

学校訪問には、仕事柄、大変興味をもって臨んだ。今回見学させていただいたキングスコート・キャンパスは、島で唯一の学校で、小学校入学前の子供の教育から成人教育までを担っていた。まさに学校が生涯教育の場、島の文化の拠点となっているようであった。

校舎はまだ新しく、太陽光発電も取り入れられていた。豊かな学習を保障する施設・設備が整えられ、きめ細かな配慮がなされていた。例えば、全教室には電子黒板が標準装備され、上学年には一人一台のパソコンが貸し出されている。再来年にはそれを iPad に買い替えるそうだ。幅広い年齢の子どもたちが学ぶことから、遊具は子どもの発達段階に合わせて設置され、その下には緩衝材として木材のチップが敷き詰められていた。

ソフトの面でもまた目を見張るものがあつた。例えば、学校を挙げての有機野菜作りの取り組みがある。子どもたちが野菜の栽培を体験するだけでなく、収穫したものが調理されて学校の売店に並ぶ。残飯からは堆肥が作られ、畑に還される。このように、子供たちの生活の中に、生物の循環を目に見える形にして体験させることは非常に意味のあることだ。また、菜園での作業に生徒と一緒に汗している女性がいたかと思えば、彼女は心理面のケアのために訪れている牧師であつたことも素敵だった。ほかにも、島にとって深刻な問題である山林火災について学習するなど、島の環境に関する学習の一端も窺えた。この島の持続可能な発展を支える人材を育てるという目標の下に、学校として一貫性のある教育が実践されているようだった。

さらに、学校のもつ芸術的な豊かさにも驚かされた。美術室には、生徒のすばらしい出来栄の作品が壁一面に貼られていた。スタジオに置かれていた楽器（ドラムやエレキギターなど）の充実ぶりにも驚かされたが、それらの楽器が決して飾り物でないことは、生徒と教師がフルートで「さくら」を演奏して証明してくれた。それらの芸術的に



質の高い授業は、多くの外部講師によって支えられているようだった。

日本の学校にとって、カンガルー島の教育に学ぶべきことは多いと感じた。しかし、このように物質的にも精神的にも豊かな教育が成り立っているのは、おそらくオーストラリアの経済的な豊かさやこの国の人々のもつ柔軟性（寛容さ）によるところが大きいのだろう。今の日本には、そのどちらもがない。日本の学校は、もはや海外の例を取り入れることを許さないほど硬直化しているし、教師は変革を起こすエネルギーもないほどに疲弊している。キングスコート・キャンパスのどこを歩いても、日本にだけいたら決して気づくことのない日本の教育現場の異常さが際立って見えてきて、ただただ溜め息が出るばかりであった。

### （３）ティーズデイル夫妻の暮らし方

最後に挙げたいのは、このツアーのカンガルー島の側のホストであったティーズデイルご夫妻の持続可能性を追求した生き方である。

途上国での経験から、私には、持続可能な生活とは、現代的なものから切り離され、若干の不便さや不潔さを我慢する生活というようなイメージがあった。ところが、彼らの生活は、そのようなイメージとは全く異なるものだった。

彼らのエコハウスは、景観を損なわないように大自然に調和して建っていた。家には自然からのエネルギーを取り入れるための高度な技術や工夫が凝らされ、生活には何の不自由もなかった。雨量の少ない季節には死活問題にもなる水も、大きなタンクに貯めて使い、汚水すら無駄なく活用していた。

それだけではなかった。彼らの暮らしは、美しさと温かさで満ちていた。海に面した窓からは、穏やかに夕日の照り返しをたたえるペリカンラグーンが見えた。冷えた体を温めてくれる暖炉。薪も国立公園で不要になったものだ。静かに流れるクラシックのメロディー。壁には、息子さんが集めたという石のオーナメントが埋め込まれていた。友人から贈られたというキルトに絵画。夕方にはカンガルーの訪れる広大な敷地。美しく手入れされた庭には、鳥の巣箱や遊び心たっぷりのオブジェがある。食卓には菜園で収穫した野菜や手作りのドレッシングが並ぶ。飼い鶏の産む卵を収穫し、無いものは隣人と物々交換して補うという。

彼らの暮らし方には、自然からの恵みをいただいて使い、できる限り汚さずに自然にお返しするという考え方や、暮らしそのものを楽しもうという考え方が貫かれているようだった。持続可能な生活とは、決して不便な昔の生活に戻ることはなかった。現代的な生活様式を変えなくても、自然と調和しながら生活できるのだということを、彼らは我々に実践して見せてくれた。彼らの暮らし方は、東日本大震災を経験し、従来の生き方や暮らし方を問われていた私にとって、「将来、このように暮らしてみたい」と思えるよいモデルとなった。



## 旅を終えて

持続可能性をテーマとした今回のスタディ・ツアー。この旅で私が学んだことを一語で表現するとしたら、「つながり」という言葉になるだろうか。生物と生物のつながり、人と自然とのつながり、人と人とのつながり、人と社会とのつながり、世代を超えた命のつながり…。そして、このスタディ・ツアーで出会った人々とのつながり。それら日常生活の中にもあるはずのさまざまなつながりに改めて気づかせ、それらの意味を考えさせてくれた旅だった。

「持続可能性」を私なりに定義すると、「様々な人々、自然、社会などと緩やかにつながり合って生きること」ということになる。人間は、様々なものとつながり合い、関わり合い、支え合うことで生きていられるのであり、人間一人だけでは決して存在しない。だからと言って、そのつながりがきつすぎると生きるのが苦しくなるから、緩やかにつながり合うのが心地よい。持続可能な生き方とは、何か特別なことをすることではなく、日常生活の中でそれらのつながりを意識し、それらに感謝しながら暮らすことではないだろうか。

大袈裟だと思われそうだが、私はこの旅で少々人生観が変わった。これからは、学校という枠の中だけでしゃかりきになって働くのではなく、人々や自然やコミュニティとのつながりの中に身を置き、そこに意味や楽しさを見出しながら仕事をしたり生活をしたりしたいものだと思う。ここらで一旦深呼吸をして（溜め息ではなく！）、これからは人生そのものを楽しみたいものだ。それが、おそらく私が探していた「持続可能な生き方」なんだろうと思う。

最後に、この学び多き旅で出会った人々とのつながりに改めて感謝を申し上げたい。





## サステナビリティに出会う旅、「始まり」の旅。

中央大学総合政策研究科総合政策専攻  
博士前期課程2年 高木佳祐

大学時代の恩師は、事あるごとに私に言った。「高木君。いい加減イスに座って腰を据えて勉強しなさい」。何でもかんでも興味を持ったことに手を伸ばし、一つのことに集中できない、研究する姿勢が整っていないことを窘めての言葉だった。

そんな落ち着きのない大学生も、今では立派な(?)大学院生となった。博士前期課程も2年目、修士論文を作成する年となった。博士前期課程最後の夏といえば、修士論文作成に集中すべき時期である。私の研究のフィールドは、何を隠そう韓国である。この時期本来フィールドワークに行くべきは、言うまでもなく韓国だ。事実、このツアーに申し込むまでは韓国に行くつもりだった。

それにも関わらず、なぜオーストラリアに行くことにしたのか。理由は簡単。イスに座っていられなかったのである。研究を進めていく中で、新しい刺激が欲しくなっていた。自分の視野が狭まり凝り固まっていくのを感じていた。アジアを出て、自分の知らない世界を知り、視野を広げたい。そうすることで研究に深みが増し、より鮮やかな論文が書けるのではないか。そう思うようになっていた。刺激への渴望は日に日に募り、時間があれば何かおもしろそうなものはないかとネットサーフィン。そこで奇跡的に検索で引っかかったのが、このカンガルー島スタディツアーであった。「これだ!」と直感が働いた。カンガルー島がどこにあるかも知らないまま、私はすぐさま参加のメールを送っていた。

こうして参加することになったスタディツアー。結論から言えば、参加したことは「大正解」だった。最初から最後まで、刺激に次ぐ刺激、発見に次ぐ発見。以下、いくつか抜粋して振り返ってみたい。

まず、アデレード大学の見学。アデレード大学の米山尚子先生に案内していただき、図書館などを見学した。そこではたくさんの学生が本を読み、議論し、アクティブに学習をしていた。彼らは楽しげに、笑顔を交えて学習していたのが印象的だった。加えて学生用のパソコンの数や、学習サポートサービスも充実していて、うらやましさ、悔しさ、焦りといった感情が沸き上がった。大学生の時に韓国に留学した際も勉強に励む学生たちに圧倒されたが、またしても海外の学生の意識の高さを見せつけられた気分だった。

続いて、ボブとジェニーのエコハウス。サステナビリティを追求したこの家には、



徹底した環境への配慮と、現代人が忘れていたゆとりと豊かさが同居した、今までに見た事のないような空間があった。そこにある一つ一つのものに、こだわりと愛情が込められていた。部屋は常に太陽の明るさに包まれ、窓の外には色が溢れ、庭には「静」寂の中にもたくさんの生命の「動」が存在していた。余計なことをすべて忘れさせてくれる、不思議な時間が流れていた。ボブとジェニーも、飼っている鶏も、のんびりと食事をしているカンガルーも、せっせと蜜を集めるミツバチも、そこではみな、穏やかな時間を共有していた。サステイナビリティな生活と聞けばストイックで質素な生活だと思いがちだが、彼らは十分に自分たちの欲求も充足させているように、私の目には映った。いやむしろ、欲求も満たせる質の高い暮らしでなければサステイナビリティな生活とは呼べないのだろう。

次に、Kingscote と Parndana の学校。人口 4,000 人程度の田舎の島の教育とはとても思えない、質の高い教育がそこにはあった。小さい頃から体で学ぶ ESD、子どもの知的水準から始める授業、柔軟に内容を変えられる授業進行、電子黒板など機材の積極導入、職能訓練を盛り込んだカリキュラム。明確な教育理念と、それを具体化した授業が行われていた。教員たちは活力に溢れ、デスクが一つもない開放的な職員室は一見穏やかながら、教員たちの熱意に満ちていた。これほど子どもも先生も「楽しそう」な学校は見たことがなかった。ここで学べる子どもたちも働ける教員も、うらやましくてたまらなかった。

そして、なんと言ってもこの島の大自然。自然がつくり出す絶景は、太陽の角度、雲の位置一つ違うだけで、まったく違った表情を見せてくれた。冬であるにもかかわらず、この島には東京の何倍もの色が溢れていた。ただ眺めているだけで、心に栄養が満ちていく、そんな感覚を覚えた。

この島で見学した多くのサステイナビリティへの取り組みは、徹底しているにもかかわらず、無理を感じさせないものばかりだった。なぜこれほど先進的な取り組みがここまで浸透しているのか。その答えは、この大自然にあるのだと思う。この地の人びとの多くは、自然が美しく、愛らしく、感情を持っていることを知っている。無理せずして、当たり前のように、人と自然が隣人として暮らしている。だから、近所付き合いを大切にすると同じように、自然に対しても思いやりをもって接している。動物たちもまた、人間を過度に怖れたりせず、隣にいたことが当たり前のように生活している。保護や管理と表現すると違和感のある、「共生」の関係がそこにはあった。

また、この島では場所によって様々な「風」が吹いていたことも印象的だった。プロスペクトヒルの風は甘く、ペリカンラグーンの風は優しく、リマーカブルロックの風は力強かった。古代アジアの人びとは、「風」は呼吸の源であり、生命エネルギー（＝気）そのものであると考えていたという。目には見えない、しかし確かにそこにあり、生命エネルギーを供給してくれる、「風」。ただ深呼吸をするだけで、自然と笑みがこぼれてくるから不思議だ。北極から吹きつける冷たくも力強い「風」が、この島の動植物たち



と人びとに活力をもたらし、心を豊かにしているのだと思った。

もっとこの島のことを知りたくなった。場所すら知らない島だったが、今は気になって仕方がない存在だ。自分の中で、何かが動き出した音がした。だから、最後のラップアップで今回のスタディツアーを漢字一字で表すという課題を課された時、私が選んだ漢字は「始」であった。

東アジアを出たことのなかった私にとって、今回のスタディツアーは当初の予想以上に視野を広げてくれるものだった。カンガルー島という地球上の小さな田舎の島は、私にとって圧倒的に巨大であった。カンガルー島に残る大自然は、世界は美しいもの、おもしろいものに満ちているということを、改めて教えてくれた。もっといろんな世界を見たい。いろんな空気を感じたい。もっと生きていることを楽しみたい。自分の中で新たな「始まり」を感じたツアーであった。

車内でボブが永田先生に話した言葉に、次のような言葉があったそうだ。

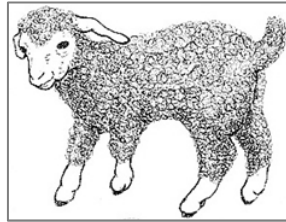
**“Sustainability is not the end. Sustainability is a process. Sustainability is a journey. I and Jenny are still making a journey.”**

一つの学びを終えることが、新しい学びの始まりになる。この学びのサイクルが、人生をより豊かにしてくれる。いつまでも学び続け、行動し続けること。それが私にとってのサステナビリティなのかもしれない。

最後に、現地でお世話になった方々、いろんな気づきとアイデアをくれたツアーの参加者の方々、企画と運営を行ってくださった永田佳之先生とボブとジェニーに、心から感謝申し上げます。これほどまでに実り多いツアーになったのも、すべては皆様のおかげです。本当に、ありがとうございました。そしてまた、お会いしましょう。



## 学びのかがり火



人間科学専攻 教育研究領域  
博士前期課程1年 辻本由比

旅はいつも、日常生活では味わえない新鮮な空気を体感させてくれますが、今回のカンガルー島への旅は、中でも特別な流れの中にいたなど、日本に帰国した今、島での出来事を懐かしく思い返しています。日本の海では嗅ぐことのできなくなってしまった純粋な潮の香りを楽しみ、いきいきとした野生動物を目にし、鮮やかな太陽の光と、森や草原の緑を身体いっぱいを感じながら過ごした日々。それらは本当に瑞々しい喜びに満ちていました。けれど、私の心に強く残ったのは、自然そのものよりも、島の方々が自然をはじめとする様々な共生について、誰もがみな何らかの形で関わりを持とうとする、その姿でした。島をあげての持続可能性を考えるカンファレンスの席にも、ティーズデイルご夫妻のエコハウスにも、国立公園やシードバンク（原生植物の保全の為に施設）や現地の学校などでも、島のどこにも、至る所に共生や共働の温かな空気は満ちていたように思います。

不思議に思われるかもしれませんが、そのような島の雰囲気は私に、フランスの後期印象主義時代の画家、ジョルジュ・スーラの絵画を思い起こさせました。そう、美術の教科書にもよく登場する、点描画の巨匠として有名な、あのスーラです。スーラの作品というと、点を並べて描く技法の特殊さに目を奪われがちになりますが、彼の作品の妙は、色彩と光学の理論に基づく、鮮やかな色の再現にあります。私の頭にふと浮かんだのは、彼が自身の絵画に取り入れた手法の中でも、「色班を並置することにより、鑑賞者の眼に映る色彩は、パレットの上で色を混ぜる方法よりも、純粋で鮮やかなものになる」という併置混色、この考えでした。スーラはキャンバスの上に色を並べ、個々の色が持つ特性を活かすことで透明感のある鮮やかな色彩のハーモニーを作り上げました。それと同じように、島に満ちていた共生と共働の空気は、動植物、そして住まう人の人種、性別、年齢の違い、障がいのあるなし、といった多様な個を大切に、共に生きるという意志の調和の中で生まれているのではないだろうか。夢のようにも思える島での

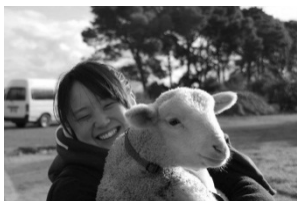


日々を離れ、日常に戻った今も、この思いは頭の片隅で小さく、しかし強く響き続けています。

カンガルー島で出会った環境保全やインクルーシブ教育の方法をそのまま取り入れて行うのは、文化や環境の違いから、難しい点も多いでしょう。けれども、根本で大切にすべきことは何かということは、きっと変わらないはずです。大切なことに改めて向き合わせてくれた今回の旅は、それ自体がかかり火のように、私を導き続けてくれるだろうと。

最後に、旅先でお世話になったティーズデイルご夫妻、見学を受け入れて下さった現地の学校や農場、国立公園のスタッフのみなさま、ご一緒して下さいった宇土先生、松井先生、多田先生、高木さん、学部生のみんな、旅をコーディネートして下さいった永田先生、そしてこのような素晴らしい機会を与えて下さった学会理事のみなさま、すべての方々に深く感謝申し上げます。





## 自然と共にいきる素晴らしさ

聖心女子大学文学部英文学科 2 年 大場夏実

カンガルー島の大自然の中で少しの時間でしたが過ごすことで、日本では感じることでできない自然の力、自然が人間に与える大きな力、自然の重要性という私にとって新しい感覚を自分の体で感じ、地元の方々と触れ合うことで、日本と違った考え方を知ることができ、それが自分のこれからの人生に大きな影響を与えてくれるものであると思うことができました。

ボブさんのエコハウスを訪れたときに感じたのは、自然と共存しているなということでした。“Quality of life”という言葉が日本で聞いても何のことだかピンときませんでした。日本にいては、持続可能性やエコのためには自分の生活から何かを減らさなくてはいけないという考えが出てきてしまい、美と持続可能性の共存ができるというアイデアなど出てきません。しかし、エコハウスは違いました。太陽の光をできる限り家の中に取り入れていたり、家の中の置物一つ一つにしてもこだわりがあり、とても可愛い家です。もし説明がなければどこに持続可能のための工夫があるのか分からないほど自然に自然の力を家に取り入れて生活していました。これが言葉通りの美と持続可能の共存であり、“quality of life”だと学ぶことができました。ボブさんのエコハウスの広い庭で一人 reflection をしていた時、確かに気温は低く寒かったですが、目の前の太陽からの熱を感じることができ、自分もこの地球の上の大自然の一部であると実感することができ、とても嬉しかったです。またそれと同時に、人間は自然なしでは生きていけないということも強く理解しました。人間は自然に生かされています。鬱になる原因の一つは自然がないからと現地の方も言うておられました。私もそれを聞いたとき納得をせざるを得ませんでした。自然の力は自分が思っているよりもはるかに大きく、そのはるかに大きな力が自分の生活に強く影響していました。

地元の学校訪問でもたくさんの新しい発見がありました。もちろんオーストラリアの教育の三本柱に持続可能性が入っていることにも驚きましたが、それ以上に学校の壁に飾ってあった5つの成功のためのキーワードの一つがとても心に残りました。それは“getting along”という言葉です。カンガルー島はとても小さい島です。そのため島の人みんなが助け合い、協力し合いながら生活していました。Relationship という言葉や human bond という言葉をこんなに頻繁に毎日聞いたことがありません。こんなにも団結の強い島でどのように一人になればいいのか最初は分かりませんでした。一人の画家と出会いその意味を理解できたように思いました。自分の周りに大切な仲間、家族、友人がいると分かっているからこそ一人になったとき本当の自分の力を発揮できるのではないかと思います。一人の時間も大切だけど、やはりそれは周りに強い味方がい



るからできることであるのだと思いました。それができる強い団結があることにとても感動しました。この人と人との繋がりこそが生徒を大きく成長させていました。人と人との繋がりもしっかりしているからこそ、自然との関係もしっかり理解できるようになるのかなと思いました。また、生徒と教師の関係もしっかりしているから、教育にゆとりが出て、楽しく学べる環境が整っているように感じました。日本人の私たちを見たたん、廊下に出てきて「さくら」の演奏をしてくれた時にとても生徒と教師の良い関係を感じ、そこからくる教育の柔軟性を感じました。日本ではチャイムに追われていたり、授業もシラバスで進み方が決められていてゆとりを感じることはあまりありません。そこが日本との大きな違いだと思いました。

このスタディーツアーで様々の面から持続可能性というものを見ることができました。それと同時に自分で五感を使ってたくさんのことを経験することの大切さを学ぶことができました。今すぐ日本で“quality of life”を実行するのは難しいことかもしれませんが、私がこの夏カンガルー島に行き、自分の目で見た大自然、出会った人々の笑顔を感じている限り、どんなに忙しい状況になってもどこでも自分の“quality of life”を作り出せることが分かったことは、これからの人生でとても大きな発見であり、財産です。野生のイルカが人間の私たちの気持ちを察知し高くジャンプしてくれたように、私たちも自然とコミュニケーションをとりながら共存していけたらいいなと思いました。





## カンガルー島が与えてくれたもの

聖心女子大学文学部英文学科 2 年 許田結莉

あれから約一ヶ月たち、慌ただしい日常生活に戻った。大学での授業、課題、バイト、雑多な東京での日々の中で、何かの拍子にふとあの島のことを思い出す。穏やかに流れていたカンガルー島の時間は、私が想像していた以上に心に刻まれている。帰国してから時間がたつほどに脳裏に焼き付けられていく大自然。こんな経験は初めてだった。どんなに遠い国に行っても、どんなに楽しくても、いつも記憶は薄れていくけれど、今回は写真のように鮮明になっていく。そうさせてくれたのは、このツアーで感じてきたことを、もっと学びたい、知りたいと心の奥から思えたからではないかと思う。私は、**Sustainability** についてはまだまだ知識が浅い。まだ自分の中で明確にならないまま、漠然とした感覚でこのツアーに参加した。そして実際にそこで見た景色、人々が、私の持っていた少しの知的好奇心を何倍にもしてくれた。

伝えたいことはたくさんあるが、その中でも日々鮮明になっていく景色や風景が3つある。一つ目はディーズデイルご夫妻のエコハウスである。あれほど家の機能、建築を見て感動し、もっと見たい、もっと聞きたいと思ったのは初めてであった。エコハウスと聞いてだいたい想像するのは、少し住みにくい、また快適さは劣るのではないかなど、マイナスのイメージの方が正直大きかった。**Sustainability** だけを考えたエコハウスならそうになってしまうのだろうが、彼らのエコハウスはそれに加えて **Beauty** が組み込まれていた。このコンセプトへの衝撃とエコハウスの美しさに魅了されてしまった。二つ目は、美術室の中で見た虹である。カンガルー島は急激に天気が変わることが多くあるため、よく大きな虹が架かる。丘から見た遠くの虹、海の地平線上に大きく架かる虹、そして訪問させていただいた学校の思わぬところで見た室内の虹。外の景色と中の景色が一体化されてとても開放的な空間だった。土着のものが綺麗に馴染んで融合され、島の特徴がそのまま室内に映しだされていた。日本では見たことがなかったからか、太陽の日差しとガラスのカッティングで作られた虹が私の心をうった。三つ目はNECの森。美術室で見た虹とは真逆の、そこには周りから孤立し、静まりかえった空間があった。外来種の木が列をなして植えられ、電気の柵にとまって死んだであろう鳥が落ちていた。NECの善意による行いが島の生態を破壊していることにとても胸が痛んだ。この三つから分かったことはエコハウスや虹のように、その土地にある材料、景色を生かして上手に生かせば生かすほど、**Sustainability** に繋がり、外のものを取り入れるとその代償として何か失われてしまうという至って単純なことである。しかし、私にとってこれ



を自分で見て、聞いて、心で感じて、全ての五感を使ってゆっくり考えることができたのがすごく大きかった。

このツアー中、体の全ての五感を使って感じ、心が震えるくらいの感動経験をたくさんした。見渡す限り誰もいない大自然の中で、カンガルー2匹をバックに見た夕日、海の向こうは南極の美しい海辺、初めて船から見たイルカの大ジャンプなどの感動は言葉に言い表すことができない。そしてその島の全てを守ろうとし、生活に反映させて生きている島の人々と、自分の生活環境の違いを改めて知り、ショックだった。けれど、私が日本に生まれ、今東京で暮らしているからこそ気づけたこともたくさんあったと思う。全く違う世界に生きているからこそ気づき、次に行動する原動力をこのツアー中たくさんもらった。また、全ての国でこれを完璧に実現するのは不可能かもしれないけれど、その土地をよく知り、長所を生かし、地域に感心と誇りを持ち、そして好きになれば、持続可能な社会を築くことに繋がるのではないかと思う。ここで学んだ全てのことを未来に繋げていきたいと心から思った。このツアーで出会った全てに、本当に感謝しています。ありがとうございました。





## 計れない時間の中で学ぶ

聖心女子大学文学部教育学科教育学2年 藤本恵実

カンガルー島の地には、過去・今・未来が共存している。世代が変わってもずっとあり続けていくであろう、サステイナブルワールド。日本の海の向こう、離れた地にはこんな世界もあるのかと、ただただ圧倒された。それを最も強く感じたのは、ボブ・ジェニーのエコハウスと、キングスコート校を訪問したときである。

エコハウス。エネルギー・水・美・自然、すべてのバランスがとれ目に見える形で **Sustainability** が実現されていた。目の前に広がる海と、見渡す限りの自然の中に身を置くと、ゆったりと良質な時の流れに入りこんでいるようだった。彼らの生活には、無理がない。すべてが自然体であった。日本で考えられる“良い生活”とは、高級な車に乗り、広い家を持ち、高級な食事を食べ、ブランドの服を着ることだろう。しかし、人が心の深いところで求める本当の意味での“良い生活”を、ボブとジェニーは過ごしていると感じた。人はいつ、自然の中で生きること、自然に生かされていることを忘れてしまったのか。こんなにも美しい生活を手放してしまったのか。忙しさに追われる日々を客観的に見つめることができた。

キングスコート校は、生徒と生徒、生徒と教師、教師と教師、お互いが信頼し尊敬しあっている数少ない学校の一つであると感じた。学校の雰囲気はゆったりとしており、その中にある生徒の真剣に学び取ろうとする姿、教師の懸命に伝えようとする姿が印象的だった。教育理念として、アボリジニ文化を伝えること・**Sustainable** なカリキュラムを組むこと・アジアへのアクセスを意識することを大切にしている。校舎に入ると梅の工作作品が並んでおり、教室にもアジアンテイストの装飾が施してあった。アジアの一部である我々日本人でも、そこまで強くそれを意識することはない。ましてや、教育に盛り込まれることは少ないだろう。幼い頃から世界に目を向ける環境にあることは、視野を広く持つてものごとを捉えることができる第一歩になると感じた。また、各教室には生ごみを入れるゴミ箱があり、校庭にはコンポストが置かれている。その肥料を使った畑もあり、食物の流れや命の繋がりを生徒は日々体で学んでいる。人は自分だけでは生きていけない。私が存在している、ということはたくさんの繋がりの中の今なのである。子ども達は、学校生活を通して身をもってそのことを学ぶことができるのだ。

島の人々の繋がりも印象的であった。初日の行われたコンフェレンスでは、教育・食・虫・動物などの専門家たちが自分の分野に関して演説した。全員に共通していたことは、みな島島の将来について、**Sustainability** について真剣に考えていたことだ。そして、



お互いが尊重しあい、協力し合っていた。この会議以外でも、島で出会う人々はみな島を愛し誇りに思っていた。このような大人たちの姿を、子ども達は後ろから見ている。だからこそ、学校での **Sustainability** に関する教育も違和感無く吸収できるし、身につくのだと思った。

計れる時間と計れない時間。カンガルー島での日々に、私は確かに測れない時間の中にいた。見渡す限りの大自然の中で、地球のエネルギーを感じることも多かった。心がほぐされ、解放されていくのが自分でもわかるほどだった。そこでの学びは一瞬一瞬がすべて自分の中に吸収され、蓄積されていった。緩んだ部分と、締められた部分。そのバランスが保たれたツアーだったと思う。本当の意味で人が成長したかどうかは、いかに計れない時間の中に身を置くことができたか、なのかもしれない。



## ●資料

---

### ●写真集 51

---

### ●事前勉強会資料集 60

---

●カンガルー島の自然と動植物について 許田結莉

●オーストラリアの基礎知識 藤本恵美

●ボブ・ティーズデイル氏について 大場夏実

●What is ESD? ESD ってなんだろう 辻本由比

### ●アンケート調査結果 67

---

### ●上を向いて歩こう ー日本のタベのテーマソングー 72

---



**August 16, 2012**

**Fly to Kangaroo Island**



**Adelaide**



**University of Adelaide**



**In the library**



**LUNCH TIME**



**South Australian  
Migration Museum**





**August 17, 2012**





**August 18, 2012**



**Learning**  
**What is**  
**Sustainability**





**August 19, 2012**



**Remarkable Rock**



**Feeling great nature**



**Seal Bay**





August 20, 2012



## Austrarian Education

- Education of aborigines
- Sustainability
- Access to Asia

Presentation of ARAHAMA



Flexibility is important for learning





August 21, 2012



Learning about dolphins



At Canola farm



Canola exported to Japan



August 22, 2012



Kangaroo Island Seed and Plant Nursery



State Emergency Services and Country Fire Service



Fine Art Kangaroo Island





## “Japanese Evening”



**Thank you very much for  
your kindness and support !**



## カンガルー島地元紙”The Islander” 掲載記事

### “Whirlwind taste of island life”

# Whirlwind taste of island life

Perhaps the question that was in Professor Yoshiyuki Nagata's mind when he decided to bring some colleagues to Kangaroo Island was: "What can we learn about environmental sustainability from the people of Kangaroo Island?" During their one week visit, hosted by Jennie and Bob Teasdale, these nine educators and students have become increasingly excited about what they've seen, the people they've met and the commitment of so many Islanders to living in an environmentally sensitive way.

Attending the Natural Resource Management Conference gave them a snapshot of the diverse environmental projects undertaken by staff. They were particularly impressed by the KICE presentation and so, later, were delighted to visit the Kingscote and Parndana school campuses, where they were given a comprehensive tour of the schools and were able to see environmental education at its best.

A visit to the Teasdales' sustainable home and an exploration of their property, a Dolphin Watch expedition with the Bartrams, a study tour to Flinders Chase and Seal Bay, a "drop-in" to Veron-



Back, from left, Yoshiyuki Nagata, Jennie Teasdale, Yui Tsujimoto, Cheika Tada, Mr Udo, Bob Teasdale. Front, Natsumi Oba, Katsuyuki Matsui, Keisuke Takagi, Yuri Kyoda, Emi Fukimoto.

ica Bates and her impressive seed and plant nursery, an Australian film evening with Bev Maxwell and Colin Wilson, a tour of the SES and CFS premises with Bevan Garmeister, an exploration of environmental art with Janet Ayliffe and Fred Peters, a taste of wine at Bay of Shoals cellar door, a visit to Travis Bell's property and then on to KI Pure Grain, were just some of the components of a busy, challenging program.

Ms Chieko Tada, a primary school teacher whose school and town were devastated by

the Japanese Tsunami in March 2011, shared her experiences with people on the Island.

She talked of the many hardships that Japanese people have gone through during and after the disaster, but stressed how important mutual support within communities has been in the recovery.

On their last evening, the group celebrated the success of the study tour by entertaining guests with a Japanese meal and an audio-visual response to what they had experienced on the Island.

Islanders who were present were overwhelmed by their positive presentation. It left us all even more committed to living lightly on this environmentally unique and beautiful Island.

The Japanese visitors would like to thank every Islander who helped to make their visit a memorable one. Special thanks to the managers at the Ozone for providing accommodation with so many extras during their visit.

*Jennie Teasdale and Yoshiyuki Nagata*

“The Islander” Aug. 23, 2012



## カンガルー島



- ・アデレードから110km
- ・（岬島県から真っ直ぐ南下）
- ・オーストラリアで3番目の大きな島
- ・（東京都の2倍）
- ・人口3500人ほど

オーストラリアを凝縮した国！！

## 自然と動物の宝庫

・島の名前にもなっている『カンガルー』はもちろん、オーストラリアで一番人気の『コアラ』をはじめ、『ワラビー（小型のカンガルー）』、海岸には『オーストラリアン・シーライオン』や『ニュージーランド・ファーシール』などのアシカ類、沖合いには『イルカ』や『クジラ』、そして夜になれば海からヨチヨチと帰ってくる『ペンギン』達にも遭える。

## カンガルー島の由来

この島を発見したイギリス人探検家マシュー・フリンダースが、オーストラリア南岸を探検調査していた途中、この島に立ち寄り、餓えに苦しめられていた彼らは、ここでカンガルーを発見し、**たくさん食べた**ことに由来しているそうです。

＊ちなみにカンガルーの肉はオーストラリアの重要な輸出品！！クセがなくておいしい！

## 『リマーカブル・ロックス』

カンガルー島のフリンダース・チェイス国立公園内にある岩。何千年もの間、風や雨、波の浸食を受けてきたもの



## 『アドミラルズ・アーチ』

波や風などの浸食作用で中アーチ状の空洞になって出来たもの



## 手つかずの大自然





## オーストラリア ～アデレード～



1

## オーストラリアの基礎知識

面積：769万2,024平方キロメートル（日本の約20倍）  
人口：約2,262万人（2011年6月。豪州統計局）  
首都：キャンベラ（人口約35万人）  
民族：アングロサクソン系等欧州系人が中心  
言語：英語  
宗教：キリスト教64%、無宗教19%



2

## オーストラリアの歴史

### ～1500年「先住民アボリジニの時代」

ニューギニアとオーストラリア大陸が地続きであった約4万年前の第四氷河期（洪積世末期）頃に、ニューギニア方面から移動。狩猟・採取による生活を続けていく

### 1500～1600年代「ヨーロッパ人の侵入」

1521～32年頃、オーストラリアを最初に訪れたポルトガル人が、香木などの価値のある物を求めて現れるが、何も発見できず。1600年代に入り、東方貿易に力を入れていた、オランダによる本格的な調査が始まる。1619年には西岸、1622年には西南岸を立て続けに調査したオランダは、オーストラリアを「新オランダ」と名づけ、1641年には、調査総監であったタスマンが、現タスマニアを当時のオランダ東インド会社総督の名をとって「ヴァン・ダイメンズランド」と名づけたが、たいした収穫も得られない。

3

### 1700年代「イギリスによる占領地化」

1770年イギリス人探検家キャプテン・クックが現シドニー郊外のボタニー湾に上陸し東海岸を調査、1785年その一帯をニュー・サウス・ウェールズと名づけ、英国王室による領有宣言をする。1788年初代総督アーサー・フィリップ率いる英船団が、流刑囚778名、海兵隊とその家族約700名を連れて、ポート・ジャクソンに現れ、本格的な入植が始まる。この時点で、先住民アボリジニは英国王室領不法滞在者となり、しいたげられ、奴隷にされるなど屈辱の日々が始まる。

### 1800年代「ゴールドラッシュと白豪主義」

1829年イギリスによる正式な領有宣言が出される。1851年カリフォルニアのゴールド・ラッシュに乗じて、金脈があるというウワサが広まり、ヨーロッパを中心に、アメリカ、中国などから大量の移民入植者が殺到。その後、ビクトリアで本当に大きな金脈が発見されビクトリアに大勢の人々が移動していく。白人達は、ゴールド・ラッシュで大量に流れ込んできた、低賃金で働く中国人移民に脅威を覚え、白人を優先し、アジア系移住者を排除する「白豪主義」が推進されていく。

4

### 1900年代以降～「国際社会への歩み」

1901年オーストラリア連邦成立。

#### 第一次世界大戦への参加

連邦国家が成立して間もなくの1914年、イギリスがドイツに宣戦布告をし、第一次世界大戦が勃発。イギリスと深い関係を持つオーストラリアも参戦することになる。大きな犠牲を払ったオーストラリアは、この後、国際連盟への加入が認められ、国際社会での地位を確立していった。

#### 第二次世界大戦への参加

オーストラリアは連合軍の勝利に貢献したが、日本軍から本土を襲撃された。シドニー郊外のカウラには、日本兵の捕虜が捨て身の大脱走を行い多くの兵士が命を落とした痛ましい歴史がある。戦後、市民や生存者の尽力で、海外で初めての日本人戦没者墓地や日本庭園、世界平和の鐘などがカウラに整備された。今では日豪友好を象徴する街になっており、地元ボランティアの手で日本兵の墓地などが手厚く守られている。

1960年代に入ってくると、イギリスの影響が弱まり、アメリカやアジアなど、広く世界と関わりを持つようになってきた。戦後、移民政策がさらに推進され、さまざまな国の出身者が移住してきた。先住民や移民を含めて、すべての国民が平等であることを政府が公約。現在では、多民族によるユニークな文化を形成する国家となっている。

5

## アデレードの歴史

コロネル・ウィリアム・ライト（ウィリアム・ライト大佐）は1836年12月にイギリスの正式植民地であった現在のアデレードを首都に選び、都市化開発も担当していた。首都として選んだ場所は重要な水の供給源であり、肥沃な土壌をもたらしているトレンス川のそば。この町はイギリス国王ウィリアム4世の妻アデレード女王にちなんで「アデレード」と名付けた。

オーストラリアの歴史でもアデレードは受刑者が移住しない通常とは異なる形態の植民地だった。町が繁栄すると移住者に有利になるためイギリス政府は例外としてアデレードに経済的援助をしなかった。

この植民地は移民者に市民としての自由が保障され、宗教迫害もない自由移民のための植民地として開拓された。

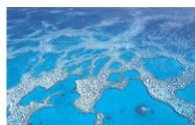


6

## オーストラリアの自然

海

世界最大の海の世界遺産であるグレート・バリア・リーフ。その全長は2300kmにも及び、日本の本州に匹敵するほどのスケールを持つ。サンゴ礁帯には大小900の島が浮かび、約300種のサンゴがあると言われている。ナポレオンフィッシュをはじめとする1500種の魚類、1mを超す大きさに成長するオオシャコガイなど4000種の軟体動物、そのほか数多くの動植物が生息するまさに楽園。



7

ブルー・マウンテンは、シドニーの西数十キロからさらに西に100kmほどの幅で広がっている、分水嶺の一部をなす台地上の山地。1959年、2000kmを超えるエリアがブルー・マウンテンズ国立公園に指定された。2000年には世界遺産にも登録されている。ユーカリの大森林から発生する霧状の油分が太陽に輝いて青い霞を作ることから、ブルー・マウンテンズと名付けられた。



山

8



## 砂漠

オーストラリア大陸の約70%が砂漠性気候帯に属する。大陸の中央部から西オーストラリア州にかけてほぼ網羅され、観光地として名高いウルル(エアーズ・ロック)はここに当たる。ノーザン・テリトリーの大陸中央部は、鉄分を多く含んだ土が酸化して赤茶けて見えることからレッド・センターと呼ばれる。砂漠性気候帯ではほとんど雨が降らず、年に1、2回程度。

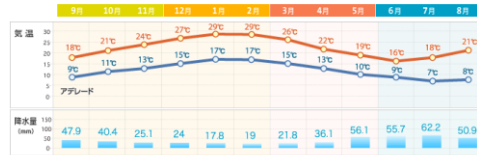


9

## ～アデレードの気候～

アデレードの気候は、年間を通して穏やかで、暖かい地中海性気候。

春(9月～10月)は基本的に晴れの日が多く、夏(12月～2月)は、気温40度とかなり暑くなる。秋(3月～5月)は春と同様に暖かく過ごしやすですが、冬(6月～8月)に近づくにつれて雨天の日が増える。冬は雪が降るほど寒くなることはない。



10

## オーストラリアの動物



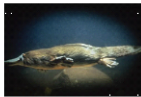
コアラとはアボリジニの言葉で「水を飲まない」という意味



時速40km/hのスピードで走る



肉食で「森の掃除屋」とも呼ばれている(タスマニア・デビル)



アボリジニが持ち込んだ犬が野生化したものとされている(ディンゴ)



哺乳類なのに卵を産む珍しい動物(カモノハシ)

11



アシカ



アザラシ



羽が小さく飛べないが、時速65kmで走る(エミュー)



イルカ

12

## オーストラリアの環境への対策

国内での温室効果ガス排出の削減  
気候変動への適応  
世界的な取り組みに対する協力

★2050年まで、温室効果ガスの排出量を2000年レベルの60%に削減する目標

- ①国内排出量取引制度を導入
- ②クリーン・エネルギー計画(再生可能エネルギーやクリーンコール技術の開発を進め、2020年までに国内電力供給量の20%を再生可能資源から調達する)

★各国へ実質的な援助を提供

- ①低排ガスのエネルギー技術開発支援
- ②温室効果ガス測定やレポートなどの分野で技術専門知識の共有

13

## 自然保護への取り組み

### 国立公園

環境保護とさまざまな生物を保護するため、オーストラリア政府によって保護制度が試行されている。現在、州や準州、特別地域などが管理している国立公園は550以上。部分的に観光客に開放されている国立公園がある一方で、立ち入りを禁止して厳しく保護されている国立公園もある。国立公園以外にも6000の保護区があり、オーストラリア大陸の11%に当たる90万平方キロメートルが保護下になっている。



### エコツーリズム

自然や環境保護の意識が強く、1000以上の各種保護団体が約80万人のメンバーが活動している。オーストラリアでは豊かな自然に触れることができると同時に、自然を守るための保護活動を学ぶことができる。自然と共存しながら観光資源として生かす「エコツーリズム」の理念も浸透。自然は自然のままに、ゴミは持ち帰るなど、美しい自然を守るための行動はオーストラリア人にとっては当然の行為。そうした自然の素晴らしさと、守る大切さを体験として感じることができる。

14

## オーストラリアの教育

### 準備教育

- ・初等教育を受ける前に準備期間として設けられている。
- ・通常は1年間だが、義務教育ではない。
- ・各州の初等教育就学年齢に従って4～5歳児が学校入学準備クラスに通う。

### 義務教育

- ・学年をYearで表す(日本の小学校に相当するのはYear1～Year6または7)
- ・中等教育は日本の中学・高校に当たり、一貫教育が採用されている(タスマニア州を除く)
- ・前期のYear7または8～Year10、後期のYear11～Year12に分かれる
- ・前期までが義務教育。後期は大学や高等職業専門学校(TAFE)への入学準備期間となり、義務教育が終了してもそのまま後期に就学する生徒が多い。

15

### 高等教育

#### 総合大学

- ・私立合わせて39の大学
- ・公立は基本的に連邦政府直轄下に置かれている。
- ・就学期間は、専攻する学部によって異なるが3～5年まで。
- ・大学に入るための入試試験はない。中等教育の後期課程修了時に行われる試験の成績とこれまでの学業成績の結果から、進学できる大学が決まるシステムとなっている。

#### 高等職業専門学校

- ・専門分野の技術習得などを目的に職業訓練を行う専門学校VET(Vocational Education and Training)が政府によって行われ、その中で州政府によって運営されているのが高等職業専門学校(TAFE=Technical and Further Education)
- ・情報産業・応用デザインサービス、第一次産業・観光・接客サービス、製造・建設・運輸サービス、ヒューマンサービス、ビジネスサービスなどの分野に分かれ、それぞれのカテゴリー内にホテルやレストラン経営、観光、通訳、スポーツ指導、ホスピタリティなど多彩なコース

16





## 教育者の課題

持続可能な未来に向けての若者の育成



持続可能な暮らし方を知らなければ、  
地球に住む生き物全ての存在が脅かされていく。

## \* 「持続可能な開発」を考察

\* ユネスコ

「持続可能な開発のための教育の10年」 (DESD)

→ 何か特別な影響??



「サステナブルな暮らし」

\* 環境との調和ある暮らし

\* 人間相互の調和ある暮らし

【バランスが大切】

## 【バランス】とは

\* 地球から受け取るのと同じだけ  
地球に返す

\* 個々人ライフスタイルを通して  
大気中に発散している炭素に対  
して責任をとる

## \* HOW...?

\* 過去から根強い価値や信仰、技能  
を引き出す

\* 古いものと新しいものをおの  
のの善さを生かす形で統合する

→ 祖先の豊かな伝統、理論や考え方を併せ  
て活かす

## \* What can teachers do for learner?

\* 私たち自身が持続可能な生活をする、ロールモデル  
になる。

→ カンガルー島に住み始めた理由

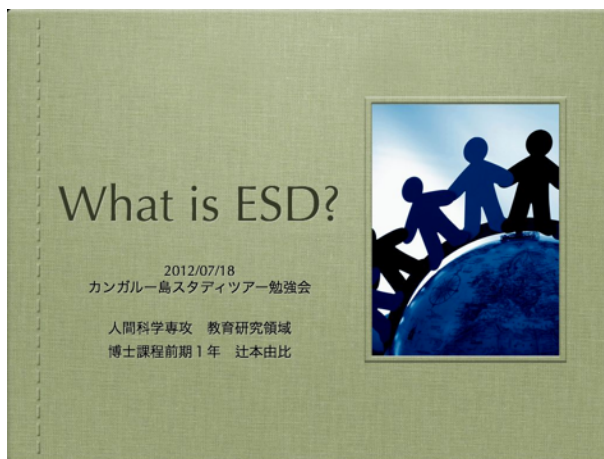
・ 学校が人間関係、環境に関する実践の場所、モデル  
となるようにする。

→ 【同じ分だけ地球に返す】

\* 菜園を作る    \* 木を植える

\* リサイクル





## SDとは...

### Sustainable Development

(持続可能な開発)

「将来世代が自らのニーズを充足する能力を損なうことなく、  
今日世代のニーズを満たすこと」

※ 国連「環境と開発に関する世界委員会(ブルントラント委員会)」  
報告書『我ら共通の未来(Our Common Future)』(1987年)における定義

## ESDとは...

### Education for Sustainable Development

(持続可能な開発のための教育)の略語

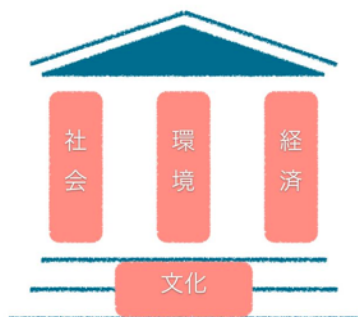
⇒ 持続可能な社会の担い手をはぐくむ教育

## ESDの基本的な観点

- ・ 人格の発達や自律心、判断力、責任感などの人間性を育むこと
- ・ 他人との関係性、社会との関係性、自然環境との関係性を認識し、「関わり」、「つながり」を尊重できる個人を育むこと

環境教育、国際理解教育、基礎教育、人権教育等の持続可能な発展に関わる諸問題に個別に対応するのみではなく、様々な分野を多様な方法を用いてつなげ、総合的に取り組むことが重要だとされている。

### ESDの3本柱とそれを支える文化



Suschool "71 steps towards becoming a sustainable school"  
<http://suschool.org.uk/poster.html>

## DESDとは...

### Decade of Education for Sustainable Development

2002年の国連総会において決議された、「ESDの10年」の略称

DESDは日本の提言からはじまり、国際連合教育科学文化機関(UNESCO)がその推進機関に指名されている。



## 「ESDの10年」にいたる世界の動き

|             |  |
|-------------|--|
| 1948年       | 第3回国連総会「世界人権宣言」を採択   |
| 1972年       | 国連人間環境会議「人間環境宣言」を採択  |
| 1980年       | 国連環境計画（UNEP）、世界自然保護連合（IUCN）、世界自然保護基金（WWF）が提出した「世界環境保全戦略」で「持続可能な開発」の概念が示される |
| 1987年       | 国連ブルントラント委員会で「持続可能な開発」の概念が展開され、広く理解される                                     |
| 1992年<br>6月 | 「国連環境開発会議」で「持続可能な開発」の実現に向けた話し合いがもたれ、国際的行動指針「アジェンダ21」に教育の重要性が盛り込まれる         |
| 2002年<br>8月 | 「持続可能な開発に関する世界首脳会議（ヨハネスブルグサミット）」で日本が「ESDの10年」を提言、実施文書に盛り込まれる               |

|               |   |
|---------------|---|
| 2002年<br>12月  | 第57回国連総会本会議にて「ESDの10年」が採択される                              |
| 2003年<br>7月   | ユネスコより「ESDの10年国際実施計画2005～2014」の草案が発表され、パブリックコメントの受付が開始される |
| 2004年<br>10月  | 第59回国連総会にユネスコの「国連持続可能な開発のための教育の10年実施計画」最終案が提示される          |
| 2005年<br>3月1日 | 国連本部（ニューヨーク）にてESDの10年開始記念式典が開催される                         |
| 2005年<br>10月  | 「ESDの10年国際実施計画2005～2014」が確定、発表される                         |

・ESDの10年は、国連ミレニアム開発目標(MDGs:Millennium Development Goals)、万人のための教育(EFA: Education for All)など、先行している国際社会の取り組みと相乗効果を生みながら展開されることが期待されている。

・学校教育はもちろん、ノンフォーマル教育、メディアなどを通じたインフォーマル教育を通じ、経済先進国、経済発展途上国を問わず、すべての年代の人々に持続可能な開発を可能にするための学びの機会を広げていくことがESDの10年の目指すところである。そのため、政府、市民社会、企業、メディアなどの幅広い協力・連携が求められている。



「ESDの10年・世界の祭典」推進フォーラム  
「ESD」を支える日本国内の推進組織とネットワーク <http://www.desd.jp/goal/network.php>

## ユネスコスクールについて

ユネスコ憲章に示されたユネスコの理想を実現するため、平和や国際的な連携を实践する学校

就学前教育、小学校、中学校、高等学校、技術学校 職業学校、教員養成学校、特別支援学校等（国公私立を問わず）  
ユネスコの理念に沿った取組を継続的に実施していることが必要

### ESDのテーマ

- ・環境学習
- ・国際理解学習
- ・エネルギー学習
- ・世界遺産・地域の文化財等に関する学習
- ・その他、持続可能な社会づくり、担い手づくりのための学習

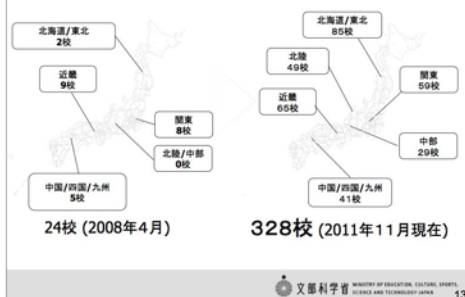
テーマが一致

### ユネスコスクールとESDの一体的推進

#### ユネスコスクールの研究テーマ

- ・地球規模の問題に対する国連システムの理解
- ・人権、民主主義の理解と促進
- ・国際理解学習
- ・環境学習
- ・その他、ユネスコの理念に沿ったテーマ

### ユネスコスクール加盟校数の現況



文部科学省「ひろがりつながるESD実践事例101」2012年:254p

### 気仙沼市立中井小学校

地域に根ざしながらも国際的な視野を育む教育活動をめざし、国際理解を基礎としたESDを推進している。新たな地域人材（リソースパーソン）の発掘、ALTや地域に在住する外国人と関わりを持つなどで、地域や地域人材との協働によるESDへの取り組みにも積極的。



### 京田辺シュタイナー学校



2001年4月よりNPO法人の形をとって活動が続けられており、現在小学校一年生から高校3年生までの約250名の児童・生徒が通う12年間一貫校。京都府南部にあることから、大阪、奈良など関西各地でのネットワークを通じて他のユネスコスクールと交流を深め、活動を広げている。

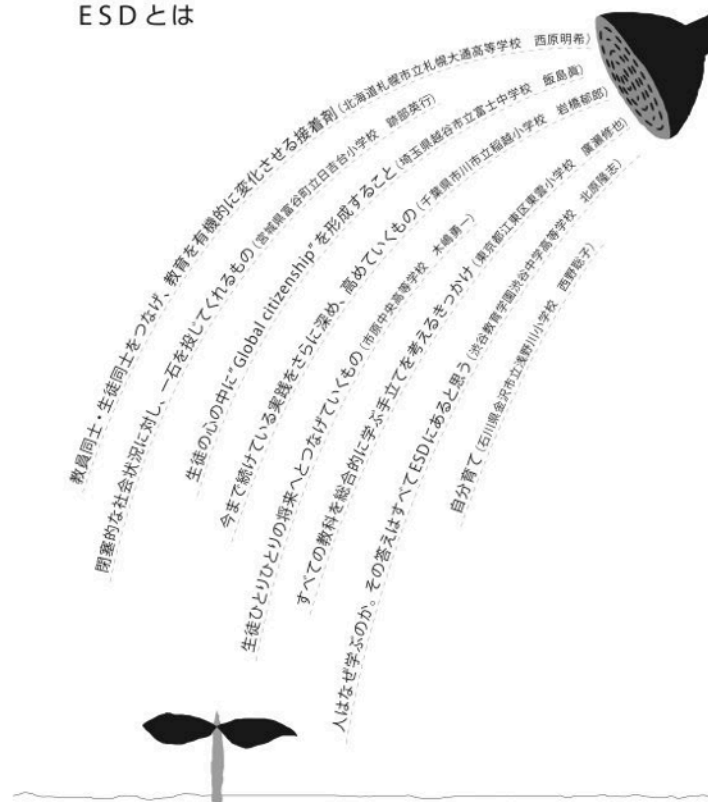


## 参考資料

- 永田佳之・吉田敦彦・日本ホリスティック教育協会（編）『持続可能な教育と文化—深化する環太平洋のESD』せせらぎ出版（2008/04）
- 文部科学省『ひろがりつながるESD実践事例48』（2011/03）
- 文部科学省『ひろがりつながるESD実践事例101』（2012/03）
- 文部科学省「持続可能な開発のための教育の10年」の更なる推進に向けたユネスコへの提言 <http://www.mext.go.jp/unesco/002/004/07092802.htm>（参照2012/07/16）
- ESD-J 特定非営利法人 持続可能な開発のための教育の10年推進会議 <http://www.esd-j.org/j/esd/esd.php>（参照2012/07/16）
- Suschool “71 steps towards becoming a sustainable school” <http://suschool.org.uk/poster.html>（参照2012/07/16）
- 「ESDの10年・世界の祭典」推進フォーラム『「ESD」を支える日本国内の推進組織とネットワーク』<http://www.desd.jp/goal/network.php>（参照2012/07/17）
- ユネスコスクールウェブサイト <http://www.unesco-school.jp>（参照2012/07/17）

Thank you for listening!

## Teacher's Column あなたにとっての ESDとは





## スタディーツアーに関するアンケート集計結果

### 1. カンガルー島で出会った Sustainability で最も重要だと思うものは何ですか？

- ・コミュニティの人々の繋がり。コミュニティの人々の絆。
- ・地域が一体となった取り組み（カンファレンスでの真剣な話し合い）
- ・Vocational training（自尊心を育てる教育）
- ・Life skill を学んだ人々を育て、ボブのような人をたくさんつくること。
- ・「立地」。辺境の、田舎であるがゆえに自由である。逆説的に同じことを日本にそのまま輸入できるとは思えない。
- ・ Respect

### 2. このツアーで最も印象に残ったことを一つ挙げてください。

- ・エコハウスの中での良質な時間と空間。
- ・エネルギー・水・美・自然、すべてのバランスがとれたエコハウス。
- ・学校の心地よさ・豊かさ。
- ・環境に対する意識の高い人が多く、かつ互いに協働している。
- ・力強く清らかな風が、人々の活力と豊かな自然を育てているのだと強く思った。ジェニーに話をしたら、南極からすばらしい風がおいしい空気をはこんでくれている、と言っていた。味のある空気は本当に久しぶりだった。
- ・Kingscote School Campus で会った自閉症の生徒の心から楽しそうな笑顔。
- ・大自然の中1人で過ごし、自然と向き合えたこと。
- ・五感で感じた大自然。このツアーで学んだことはたくさんあったが、すべて五感で満足できたのはカンガルー島の大切に守られている大自然だった。ボブの家で30分一人になった時、二匹のカンガルーと過ごした感覚は本当に忘れられない。

### 3. このツアーでの新たな「気付き」がありましたか？ある場合、1～3つ位挙げてください。

- ・忙しさの中でも他者への思慮深さを大切にすること。
- ・自然の厳しさと美しさ（10代20代アウトドア派だった頃の遠い忘れかけていた記憶を思い出した）
- ・様々な関係性・つながり（種と種、人と人、人と社会、生命）の中に生きていること



を実感した。

- ・他者（自分とは違うもの）への思慮や配慮。互いに認め合うことの大切さ。

人口が少ないせいもあるが、コミュニティのメンバー同士で支え合い、豊かな生活を維持している様子を目の当たりにして、改めて地域コミュニティでの繋がり的重要性を感じた。

- ・自然の中で暮らす生物は、人間を極度に恐れない。（カンガルーやアザラシ）

ストックにエコを追求しても、最高にゼイタクな暮らしはできる。（エコハウス）

世の中にはまだまだたくさんの面白いこと、学ぶべきことがたくさんあること。（カンガルー島の教育実践やボブ・ジェニーの知恵、大自然）

・日本において一般的に良く見かける建築物は、効率性やコストの削減を重視した無機質なものの、上辺のデザインのみが整えられたもの、環境への配慮はされているものの美しさという点は損なわれているものが多い印象を持っていた。しかしティーズデイル氏のエコハウスとその周辺も含めたデザインは、機能性と環境への配慮、美しさを兼ね備えているものが多く驚かされた。

・人間と自然がこんなにも親密な関係にあること。（人間は自然なしでは生きられない。人間の心を大きく動かす力がある。）

- ・他者への敬意（Respect）が生徒を成長させ、学校の雰囲気も作り上げる。

・五感で学ぶことの大切さ。Active Education もそうだが、このツアーでもただ聞いてるときより、見たり森を歩き回っている時のほうが自然も断然生き生きしていた。

- ・海も空も空気も、地球という名のもと繋がっている。

- ・自然が人間に与える影響力の大きさ。

#### 4. このツアーの課題や改善すべき点があれば、教えて下さい。

- ・自由時間の確保。

- ・教員の参加が少なくもったいない。また、次回も社会人採用枠を作って欲しい。

- ・1日の予定がタイトであり、情報過多になることがあった。

- ・「明日の森」での植樹が出来なかった。

・個人的には語学力。英語が出来れば何事も多くのことを学べたように思う。ツアーに関しては、もっと事前学習を深いところまですべきだった。訪問先のことをもっと調べておけば、もっと踏み込んだ質問もあったかもしれない。

・フリーの時間が半日～一日あるとよかった。グループ中での交流の時間も貴重なものだったが、一人になって自分の中で学んだことや経験したことを深める時間が足りなかった。

学生から先生や院生に質問したり、一緒に議論したりする時間がもっと欲しかった。

- ・日本のタベの準備期間が限られていたため、本来は学生が主導して行うべきプレゼン



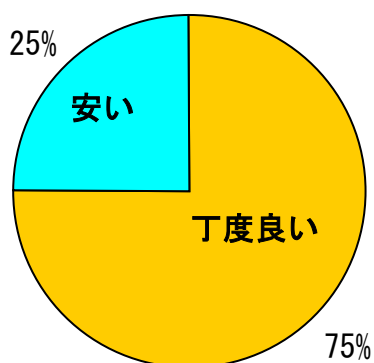
テーションについてかなりの部分を先生方に頼っていた。

- ・学校見学において、生徒と交流する時間が少なかった。
- ・カンガルー島の気温や服装の情報が欲しかった（服装に困った）。
- ・持ち物の確認のメールがもう少し早く受け取れればよいと思った。
- ・島のキャノーラオイルを日本に輸出するのではなく、バイオディーゼルにして、島の船・自動車・耕運機などの燃料にすれば、より持続可能性が高まると思った。

## 5. 参加費についてあてはまる番号一つに○をつけて下さい。

- ① ツアーの内容に比して高い
- ② ツアーの内容に比して丁度良い
- ③ ツアーの内容に比して安い

### 結果：参加費について



## 6. 今、自分が思う Sustainability とは何ですか？

- ・持続させるに値するものは何か、時間をかけて話し合い、大切に育むこと。
- ・自然の流れに逆らわず、周りのものと調和して生きること。
- ・地球における人間のありかたを問い続け、話し合い続け、行動し続けること。人間は本当は地球の白血球的存在なのだと思うている。こうしたことを考え続け、議論し、行動し続けることだこの旅行で考えた。
- ・一元的な見方にとらわれず、柔軟に物事をとらえ動かしていくこと。
- ・自分が目に入るすべて（自然・人間・物）と共に暮らしていくこと。
- ・人間だけでなく自然も生きているということを忘れない。
- ・自分のライフスタイルを貧しくするのではなく、今自分がいる場所や持っている能力



を、最大限の知識を使って考え守り続けること。あえていろんなことに手をつけたり、キツくするのではなく、自分のものに使命感を持って成し遂げること。

・自分と、すべての他者を尊敬する想いと、それを実行に移す行動力。

**7. このツアーでの様々な場所で色々な体験をしました。次に挙げる訪問であなたはどのくらい満足しましたか？当てはまる箇所に○をつけてください。**

- ① アデレード市内観光
- ② 自然資源マネジメント委員会主催のサステナビリティ会議
- ③ ティーズデイルご夫妻のエコハウス
- ④ コアラ・サンクチュアリー
- ⑤ 奇岩群見学
- ⑥ 野生のアザラシ見学
- ⑦ キングスコート小学校
- ⑧ パーンドナ小学校
- ⑨ ワイナリー
- ⑩ イルカ観察
- ⑪ 生徒による演劇
- ⑫ 農場見学
- ⑬ 地元のお宅での映画鑑賞会
- ⑭ 種子バンク
- ⑮ ボランティア消防団
- ⑯ アート・ギャラリー
- ⑰ 「日本の夕べ」



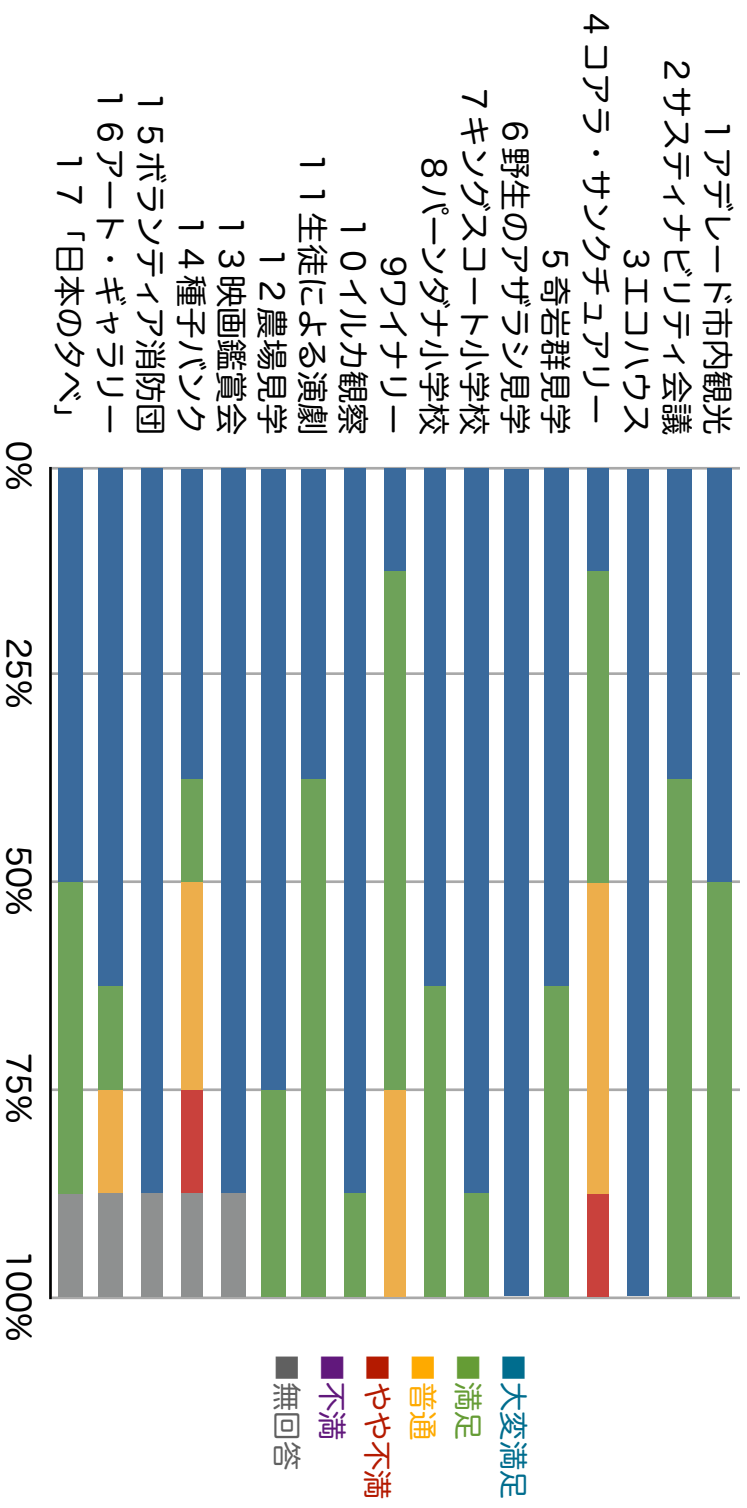


図1. 各プログラムについての満足度



図2. ツアー全体についての満足度



## 日本の夕べ テーマソング

上を向いて歩こう  
永六輔作詞・中村八大作曲

上を向いて歩こう  
涙がこぼれないように  
思い出す春の日 一人ぼっちの夜

上を向いて歩こう  
にじんだ星をかぞえて  
思い出す夏の日 一人ぼっちの夜

幸せは 雲の上に  
幸せは 空の上に

上を向いて歩こう  
涙がこぼれないように  
泣きながら歩く 一人ぼっちの夜  
思い出す秋の日 一人ぼっちの夜

悲しみは 星のかげに  
悲しみは 月のかげに

上を向いて歩こう  
涙がこぼれないように  
泣きながら歩く 一人ぼっちの夜

一人ぼっちの夜  
一人ぼっちの夜



## ●第二部 英文報告書



## Forward

It was at the end of the year in which Japan was hit by one of the most powerful earthquakes in recorded history when I started to conceptualize a study programme to learn about sustainability with Mr. Bob and Ms. Jennie Teasdale, the owner of an 'eco-house' on Kangaroo Island, South Australia. It was the time when the Japanese society was in the middle of turmoil over the crisis on energy, food and lifestyle, caused by the earthquake and the Fukushima Daiichi nuclear disaster. At that time the government, as well as its people were running about in utter confusion over the shortage of electricity and security of food due to radiation leaks from the Fukushima nuclear plant.

Under such circumstances the Japanese schools were also in the middle of confusion. It is true that in the Basic Plan for Promoting Education it is clearly written that we should inspire the public widely on the importance of ESD for the realization of a sustainable society where people can live safe lives. In addition, we should also strengthen the coordination of governmental ministries and ensure the creation and dissemination of ESD (Education for Sustainable Development) programmes. However the reality was that teachers had to teach without any societal consensus on should be sustained and what should not.

From this catastrophic situation, we have come to reconsider the role of sustainability in education itself as it becomes more and more important, as a result of top-down educational reform gradually prevailing into the Japanese education system.

The purpose of our study programme on Kangaroo Island thus, was obtaining crucial insight for re-building our lifestyles, agriculture and food, energy and education after the Great East Japan Earthquake, as well as turning our thoughts to the relationships between nature and human-beings in the midst of pristine nature on the Island.

The tour was organized with full understanding and cooperation of the Japan Association for International Education of which many of the members are teachers. After the announcement of the programme for the public on the website of the Association, a total of nine participants; four teachers including one school principal, as well as graduate and undergraduate students took part in the program.

The programme actually turned out to be an opportunity for mutual learning, because one of the participants was Ms. Chieko Tada, teacher of a primary school in



the disaster-affected area of Japan. She kindly made a presentation for the school children and teachers at a local state school, and another one for those who were invited to a Japanese evening organized by the tour group on the last day of the programme. This kind of mutual learning, I believe, enriched the programme more than I expected. I would like to take this opportunity to extend my gratitude to Ms. Tada who devoted herself for the presentations during the tour.

One of the achievements of the programme this time was that participants have come to know that sustainability and quality of life are not contrary to each other, and that community bond is such an important factor for a sustainable society. They have learned this from their interactions with the people on Kangaroo Island, and from experiencing the mutual understanding and warm relationships that have been built among the people on the Island. For further understanding on how they felt and what they have learned about, please read the records of their impressions and results of the questionnaire in this report.

Sustainability is such an abstract word. However, the participants of the study programme have gained much knowledge and new skills, as well as actual ideas and practices, thanks to the people and nature of the Island. Mr. Kofi Annan, former Secretary-General of the United Nations said, “Our biggest challenge in this new century is to take an idea that seems abstract – sustainable development – and turn it into a reality for all the world's people.” It can be said that people on Kangaroo Island are great teachers, because they showed us how to tackle the challenge we face.

Last but not the least, I would like to use this space to express my gratitude to the ‘teachers’ we have met on the Island. Our sincere thanks should particularly go to Mr. Bob and Mrs. Jennie Teasdale, and all the people who kindly extended their heart-felt hospitality during our stay there.

Yoshiyuki Nagata  
Programme Director

Associate Professor, University of the Sacred Heart, Tokyo



# Japanese Study Tour 2012

## Retrospective Analysis

Bob Teasdale  
Jennie Teasdale

### Introduction

Unquestionably the Kangaroo Island Study Tour by a group of 9 Japanese Educators was a success. The group arrived with high expectations and left with those expectations filled, and much more. Additionally, Kangaroo Islanders participating in the study tour felt very excited about the response of the group and the positive feedback they received from the visitors. The brief report that follows attempts to identify the reasons for the success of the visit and to mention its highlights.

### A Dozen Reasons Why the Study Tour Succeeded

- 1 The preparedness and enthusiasm of every member of the visiting Japanese group.
- 2 The leadership by Prof Yoshi Nagata was informed, sensitive and wise. Yoshi was able to manage the mixed group optimally, using mature members to inspire and support younger students.
- 3 This cross cultural experience demonstrated how two very different cultures can celebrate their differences, but simultaneously find significant points of connection.
- 4 The location was ideal. Kangaroo Island embraces environmental sustainability and provides opportunities for visitors to observe and research this vital issue.
- 5 Accommodation: The comfort, the location, the welcome and the cost of the Ozone Hotel made it an ideal place for the group to stay.
- 6 A collaboratively well conceived, well paced, varied, challenging and educational program about environmental sustainability ensured the success of the study tour.
- 7 The evaluation of previous Japanese study tours enabled the organisers to evolve and improve the content and delivery of the 2012 program.
- 8 A long standing, culturally sensitive, close relationship between the Japanese leader (Yoshi) and the Australian organisers (the Teasdales) ensured a vibrant, culturally appropriate program was devised and implemented.
- 9 The local Kangaroo Island community was willing to be involved in every aspect of the program and so created a positive, welcoming environment in which educational exchange took top priority.



- 10 Close encounters with community members such as at the film night, the NRM Conference, the Teasdales' home and the final dinner at the Ozone, created a closeness and respect that will not be easily forgotten by Kangaroo Islanders or Japanese visitors.
- 11 The personal reflection time at the Teasdales' property enabled visitors to engage with the environment and themselves in a very profound, not easily forgotten way.
- 12 Appropriate, efficient travel to and from Japan without a change in time zones, helped participants to swing into the program without too much difficulty.

### **Some Highlights of the Study Tour**

Each participant from Japan and all Kangaroo Islanders involved in the program will have their own highlights; however viewing from the outside we believe the following activities were particularly memorable:

- 1 The concluding Japanese dinner at the Ozone with its thoughtful responses to the study tour and exceptional Japanese hospitality for invited guests.
- 2 The moving presentation by Ms Chieko Tada about the impact of the tsunami on her school.
- 3 The visit to the local schools – KICE. The openness and enthusiasm of the school community to share their understanding of education for sustainable development and the response of the Japanese visitors.
- 4 The willingness of all Japanese visitors to accept, manage and celebrate cultural difference. Eg., language, food, behaviour cultural mores etc.
- 6 The engagement of every visitor with nature at every level: the marine environment, wildlife on the land, the sky, the weather, the natural vegetation, the rocks and rivers and so much more.



## List of Participants

|                             |   |
|-----------------------------|---|
| <b>Mr. Yoshiyuki Nagata</b> | Associate Professor, University of the Sacred Heart, Tokyo<br>Email: yoshy@pobox.com  |
| <b>Mr. Yasuhiro Uto</b>     | Professor School of education, Sugiyama Jogakuen University<br>Principal, Sugiyama Jogakuen University Affiliated Primary School<br>Email: uto@sugiyama-u.ac.jp |
| <b>Mr. Katsuyuki Matsui</b> | Teacher of social studies, Osaka Prefectural Asahi High School<br>Email: k-matsui@asahi.osaka-c.ed.jp   |
| <b>Ms. Chieko Tada</b>      | Teacher, Sendai Municipal Shougen Elementary School<br>Email: chieko-t@d4.dion.ne.jp  |
| <b>Mr. Keisuke Takagi</b>   | Postgraduate student, Chuo University, Graduate School of Policy Studies<br>Email: tkgksk21@gmail.com   |
| <b>Ms. Yui Tsujimoto</b>    | Postgraduate student, University of the Sacred Heart Tokyo<br>Email: ameakari@mo.petit.cc   |
| <b>Ms. Natsumi Oba</b>      | Undergraduate student, University of the Sacred Heart Tokyo<br>Email: dkdmi723@gmail.com  |
| <b>Ms. Yuri Kyoda</b>       | Undergraduate student, University of the Sacred Heart Tokyo<br>Email: kyuyun723@gmail.com   |
| <b>Ms. Emi Fujimoto</b>     | Undergraduate student, University of the Sacred Heart Tokyo<br>Email: emi19920406@yahoo.co.jp   |



## **List of Respective People and Collaborating Organizations**

Bob Teasdale

Jennie Teasdale

Tel: (+61)8-8370-9499, 8-8553-7373

Fax: (+61)8-8370-9499

Address: PO 656 Penneshaw, Kangaroo Island, South Australia, 5222

E-mail address: [teasdale@internode.on.net](mailto:teasdale@internode.on.net)

Kingscote Campus of Kangaroo Island Community Education (KICE)

Tel: (+61)8-8553-2074

Fax: (+61)8-8553-2075

Address: 5 Centenary Avenue Kingscote, Kangaroo Island,  
South Australia, 5223

E-mail address: [info@kice.sa.edu.au](mailto:info@kice.sa.edu.au)

URL: [www.kice.sa.edu.au](http://www.kice.sa.edu.au)

Whale Dolphin Conservation Society

Tel: (+61)8-8553-7190

Address: PO Box 30, American River, Kangaroo Island,  
South Australia, 5221

E-mail address: [bartram@kin.on.net](mailto:bartram@kin.on.net)



## Programme Schedule

| DATE                                    | TIME  | ACTIVITIES  |
|---|---|---|
| <b>DAY 1:</b><br><b>15 August, 2012</b> | 10:30<br>16:45<br>22:20   | Departure from Narita<br>Arrival at Kuala Lumpur<br>Departure from Kuala Lumpur   |
| <b>DAY 2:</b><br><b>16 August, 2012</b> | 9:10<br>10:00~12:30<br><br>12:30~14:00<br>14:00~16:00<br>17:25<br><br>18:00   | Arrived at Adelaide International Airport<br>South Australian Migration Museum,<br>The University of Adelaide<br>Lunch, Sightseeing in Adelaide<br>National Art Gallery<br>Departure from Adelaide International<br>Airport<br>Arrived at Aurora Ozone Hotel                      |
| <b>DAY3:</b><br><b>17 August, 2012</b>  | 8:30~11:00<br><br>11:00~11:45<br>11:45~12:30<br>12:30~13:15<br>13:15~14:25<br>14:25~17:30<br><br>19:00~21:00<br>21:15~22:00 | Registration for the Kangaroo Island Natural<br>Resource Management Board Conference<br>at Ozone Hotel<br>Morning Tea<br>Conference continued<br>Lunch<br>Conference continued<br>Bus tours: ①Farm, Fire, Feathers and<br>Ferals ②Catchment to Coast<br>Dinner<br>Wrap-up Meeting |
| <b>DAY4</b><br><b>18 August, 2012</b>   | 9:30<br>10:15<br>11:00<br>11:30<br>11:45~12:30  | Bus to Teasdales' House<br>Visit Prospect Hill<br>Arrive at Teasdales' House<br>Explaining the Program for the week<br>Sustainability Walk and talk with Jennie and   |



|   |   |  |
|---|---|--|
|   | 12:30~13:30<br>13:30~15:00<br>15:00~16:30<br>16:30~17:45<br>18:00~20:00<br>20:00~                         | Bob Teasdale<br>Australian BBQ Lunch<br>Sustainability Walk and Talk continued<br>Question-and-Answer Time<br>Bus to Ozone Hotel<br>Dinner<br>Wrap-up Meeting  |
| <b>DAY 5:</b><br><b>19 August, 2012</b> | 9:00~10:30<br>11:00~12:15<br>12:30~12:45<br>13:30~14:00<br>14 30~17:00<br>17:00~<br>18:00~20:00<br>20:00~ | Bus to visit Hanson Bay Koala Sanctuary<br>Bus to visit Flinders Chase National Park<br>Lunch<br>Bus to visit Remarkable Rocks<br>Bus to visit Admiral's Arch and Seal Bay<br>Bus to Ozone Hotel<br>Dinner<br>Wrap-up Meeting                  |
| <b>DAY 6:</b><br><b>20 August, 2012</b> | 9:30~12:00<br>12:00~15:00<br>15:45~17:00<br>17:00~<br>18:00~20:00<br>20:00~                               | School Tour:<br>Kingscote School Campus<br>Parndana School Campus<br>Visit to Local Winery<br>Bus to Ozone Hotel<br>Film and Dinner at Bev and Colin's House<br>Watch Movie "Storm Boy"<br>Wrap-up Meeting                                     |
| <b>DAY 7:</b><br><b>21 August, 2012</b> | 9:00~12:30<br>12:30~13:30<br>13:30~14:30<br>14:30~15:30<br>15:30~16:45<br>16:45                           | Bus pick up for<br>Dolphin Watch Programme on the water<br>Lunch at Ozone Hotel<br>Bus to KICE Performing Arts Center to view<br>a student drama<br>Bus to visit canola farm<br>Bus to visit Kangaroo Island Pure Grains<br>Bus to Ozone Hotel |



|                                    |  |   |
|------------------------------------|--|---|
|                                    | 18:00~20:00<br>20:00~  | Dinner<br>Wrap-up Meeting   |
| <b>DAY 8:<br/>22 August, 2012</b>  | Morning<br>14:00~15:00<br>15:00~16:00<br>16:00~17:00<br>18:30~ | Free Time: Walk around Kingscote<br>Visit to Kangaroo Island Seed and Plant Nursery<br>Visit to State Emergency Services and Country Fire Service<br>Visit to Fine Art Kangaroo Island<br>Japanese Evening and Presentations with invited guests at the Ozone Hotel |
| <b>DAY 9:<br/>23 August, 2012</b>  | 9:30~<br>10:30<br>11:05<br>14:30<br>20:45<br>23:30             | Bus to Kingscote Airport<br>Departure from Kingscote<br>Arrival at Adelaide<br>Departure from Adelaide<br>Arrival at Kuala Lumpur<br>Departure from Kuala Lumpur  |
| <b>DAY 10:<br/>24 August, 2012</b> | 7:40   | Arrival at Narita   |



## Impressions and Comments

---

● Everything Is Connected Each Other

Teacher, Sendai Municipal Shougen Elementary School  
Chieko Tada

● A journey to encounter sustainability, a journey of the “Beginning”

Postgraduate student, Chuo University, Graduate School of Policy Studies  
Keisuke Takagi

● Guiding Light of Learning

Postgraduate student, University of the Sacred Heart Tokyo  
Yui Tsujimoto

● What I feel in Kangaroo Island

Undergraduate student, University of the Sacred Heart Tokyo  
Natsumi Oba

● What the Island of Kangaroos Gave Me Undergraduate student,

University of the Sacred Heart Tokyo  
Yuri Kyoda

● Learning in the time which cannot be timed

Undergraduate student, University of the Sacred Heart Tokyo  
Emi Fujimoto





## Everything Is Connected Each Other

Teacher, Sendai Municipal Shougen Elementary School  
Chieko Tada

The Kangaroo Island Study Tour 2012 greatly impressed me even though my time there was brief. During the study tour, I met many interesting people and learned about sustainable development on Kangaroo Island. It caused me to reassess how to work and live in Japan. Here I will write about some of my experience.

First, what impressed me the most is that many people cooperate for the island's sustainable development. People attending the Kangaroo Island Natural Resource Management Board Conference discussed how to preserve the island's nature. The staff working at the National Park, the Seal Bay, and the Dolphin Watch Program showed love and respect for nature. The school teachers and students practiced some programs for learning sustainability. Thanks to them, I could learn what "sustainability" is. The key to understanding sustainability is "relationships". Everything is linked with everything else; human and nature are linked; people and people are connected; people and community are connected. I think that sustainability is to live while recognizing such relationships around us.

Second, I was also impressed by the quality of education in KI. I am a Japanese teacher, so I was interested in education in KI. When I visited Kingscote Campus, I found a lot of differences between the education in Japan and in KI. The school has a large amount of staff for small class size. Also, the government and the community give a lot of support to education. Such quality education is, I think, guaranteed by economic prosperity and people's flexibility that the Japanese do not have. Our educational situation is far from KI's. However, I will consider for what I can do for education of sustainable development.

Third, the Teasdale's taught me what sustainable lifestyle is. Their sustainable house is well-designed and harmonizes with nature. It is warm and beautiful. Before seeing their house, I thought that sustainable lifestyle meant enduring inconvenience and dirtiness. But, they showed it doesn't mean going back to



pre-modern life. They showed us how we could live sustainably after the Great East Japan Earthquake.

During my stay in KI, I had two opportunities to give a presentation on my experience of the tsunami. Many people watched my presentation with deep concern and expressed sympathy for the victims of the disaster. I will communicate their feelings to my friends and students. I appreciate the wonderful hospitality of the all the people in KI.



## A Journey to Encounter Sustainability, a Journey of the “Beginning”



Chuo University, Graduate School of Policy Studies

2<sup>nd</sup> year master's degree

Keisuke Takagi

When I was a college student, my former teacher always told me “Mr. Takagi, why don't you just settle down and start studying?” I was always the one who pursue my interests and could not focus on only one thing. Above all, I was not prepared for my research. She told me this to reprimand me for these behaviors.

But I made it to master's degree and now I'm on my second year. It is a time when we are supposed to work on our master's thesis. My research field is Korea, therefore, it won't be surprising if I had gone to Korea to do the field work. Nevertheless, I went to Australia only because I could not settle down and do the research. As I was working on my paper, I started to have an inspiration because I felt that my horizon would be getting narrower if I kept doing what I was doing. I just wanted to travel out of Asia, explore a new world, and broaden my view. This, I believed, would lead me to write a better, meaningful paper. With this in mind, I checked the internet to find something interesting and luckily, I found this study tour to Kangaroo Island. I felt this opportunity was destiny, and so I immediately sent a message saying “I would love to come.”

In fact, it was the best decision I had ever made. I was very inspired and was able to make a lot of discovery the whole time, and would like to reflect on some of them here.

First, Ms. Yoneyama took us to a tour inside Adelaide University. In the library, many of the students were reading books and having active discussions. The fact that they were enjoying studying with the smile in their faces really impressed me a lot.

In addition, the facilities that the school offers made me feel envious. It was



almost the same as how I got impressed by the hard working students in Korea. Second, we went to Bob and Jennie's eco-house. This house was filled with a different kind of atmosphere filled with comfort and luxury- something that I had never seen before. There was affection in every single piece of object there. The room was always filled up with a warm light from the sun; outside the window, there were a wide variety of colors, and there was both silence and movement in the yard. Somehow it felt like time was running very slowly. Bob and Jennie were living in harmony with chickens, kangaroos and bees. We might think a sustainable life style means stoic and frugal one. But on the contrary, it seemed like they were very satisfied with the kind of life they have. In fact, I believe that a sustainable lifestyle is one where we are fully satisfied with the things that it offers.

Next, we visited some schools in Kingscote and Parndana. It was just a small island inhabited by 4,000 people but the high quality of education there was just unbelievable. A very concrete educational philosophy and curriculum were applied in those schools. The staff room seemed to be quiet, but it was, in fact, full of teachers' passion and motivation. It looked "fun," and I was just envious of the pupils and teachers who were there.

Above all, one of the most impressive things was the great nature in this island. They showed me various pictures the whole time. Even though it was winter at that time, the island was a lot more colorful than Tokyo, and my heart was filled with satisfaction by just looking at them.

Many of the attempts for sustainability on this island seemed concrete, and yet they did not seem to be impossible. Why are these advanced approaches common among citizens? The answer to this question, I believe, lies in this great nature. Many of the citizens already know that the nature is beautiful, lovely, and even emotional. They took nature for granted as a neighbor who we should treat with utmost care. This relationship is called "coexistence," not "protection" nor "control."

In addition, it was also impressive that they had various wind depending on where we were. The one on Prospect Hill was sweet, one on Pelican Lagoon was gentle, and the one on Remarkable Rocks was dynamic. In the old times in Asia, people regarded the wind as the origin of breathing and life. Wind is something we cannot see, but it is surely there, giving us life energy. It was interesting that we could not stop smiling when we did the deep breathing. I felt cold but the strong wind from the Arctic pole has been giving the energy and wealth of the mind to the people and every living animal.

I became more curious about this island. It meant a lot to me even though I had no



idea where it was before joining the tour. I knew something inside me had started. Therefore, when I was asked to come up with one Kanji character, a Chinese character being used in Japan at the final wrap-up meeting, I did not hesitate to choose the one that meant “the beginning”

For someone like me, who had never been out of Asia, this study tour has made my view broader, much than I had ever expected. The small Kangaroo Island in the big globe was way too huge for me. The great nature in the island made me realize that the world was filled up with the beautiful and interesting things. This tour was the beginning of my journey to seek the world.

The following is a quotation from Bob while he was talking to Mr. Nagata inside the bus.

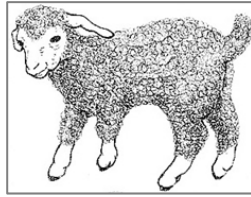
“Sustainability is not an end. It is a process. Sustainability is a journey. I and Jennie are still on a journey.”

To complete one learning leads to the new one. This learning cycle enriches people’s lives. For me, to keep learning and acting might be how I define sustainability.

To sum up, I would like to express my gratitude to the people I met during the tour, Mr. Nagata, and Bob and Jennie for their great help. Thank you very much and hope to see you soon.



## Guiding Light of Learning



Postgraduate student, University of the Sacred Heart Tokyo

Yui Tsujimoto

Travelling always gives me a feeling of freshness I can't get out of everyday life, but looking back on my latest trip to Kangaroo Island now after returning to Japan I remember the things that happened on the island with fondness and realized it was a particularly special time. It was a time spent taking in the pure sea water fragrance which one can no longer do in Japan, watching wild creatures busting with life and feeling the vibrant rays of the sun, the forests and the grass fields with every bit of my body. That feeling made me truly happy. But, even more than the nature itself, what really left an impression on me was the way in which every single person living on the island made an effort in some way for harmonious coexistence with nature and many other things. In the conference to consider sustainability of the island, at Mr. and Mrs. Teasdale's eco house, the national park and seed bank (a facility to preserve native vegetation), the local schools and so forth, I genuinely felt that every single part of the island was overflowing with warmth towards coexistence and cooperation.

Some may find it strange but the atmosphere on Kangaroo Island made me think of paintings by the French Post-Impressionist painter, Georges Seurat. That's right. The Georges Seurat who often features in art textbooks, famous for his Pointillism technique. When people view Seurat's paintings they are often distracted by the dots, but in actual fact the rarity of his works is how he could reproduce the vibrancy of colors based on color and optical theory. When I was on the island, Seurat's technique of side-by-side color mixing, in other words, "By lining up color spots, the viewer sees colors which are purer and more vibrant than if they were blended on a pallet." came to my mind. Seurat would line up colors on a canvass, and create a vivid color harmony with a feeling of opaqueness whereby each individual color's unique characteristics were expressed. In the same way, I felt that the atmosphere of coexistence and cooperation that was overflowing on



Kangaroo Island was born amidst a harmonious desire to live together and value the uniqueness of all, irrespective of animal, plant, human, race, gender, age, disability and so forth. Even now, back in my everyday reality after a visit to an island that feels like a dream, that thought remains in my head, small but strong. .

No doubt there would be many difficulties involved in taking up the environmental protection and inclusive education methods that I saw on Kangaroo Island as they are. However, I am sure that the underlying notion of what should be valued most remains the same. This trip, which allowed me to once again realize what was important, and It may light me to a better way like “guiding light”.

Finally, I would like to extend my sincere thanks to Mr. and Ms. Teasdale for their kind hospitality during our trip, all of the staff at the local schools, farms and national park that allowed us to come and visit. I would also like to thank Mr. Uto, Mr. Matsui, Ms. Tada, Mr. Takagi and all the undergraduates, Mr. Nagata who arranged the trip, and all the directors who provided us with this wonderful opportunity.



## What I feel in Kangaroo Island



Undergraduate student, University of the Sacred Heart Tokyo

Natsumi Oba

It was not so long time that we spent time in Kangaroo Island but I could learn a lot of things and I felt something in the nature what I had never felt in Japan. If I had not been to Kangaroo Island, I could have not felt the power of the nature and how the nature helps our life. Now I know the importance of the nature. Also having communications with local people was good chance to know the differences between Australia and Japan. I am pretty sure that everything I saw, heard and felt in Kangaroo Island will give me big effects to my life.

At the first time when I heard the word “quality of life”, I could not understand what that is meaning. But when we visited Bob’s house, walking around the house and talk with Bob and Jenny, I found what is “quality of life”. Just staying in Japan, people do not think that sustainability and eco to save the nature could not be coexistence. Moreover, Japanese people tend to think we have to take either modest sustainability or gorgeous life. In Kangaroo Island, the people we met who live in there, sustainability was not a special thing for them. Actually they were enjoying living with sustainability so sustainability with beauty gives us quality of life. And also, quality of life gives us the leeway of our feelings. It will be related to power of the nature. Living with sustainability, if I paraphrase it could be living with nature I thought. Sustainability gives us the leeway. Even I could see the leeway at the school. When one music teacher saw us, that teacher started playing the instruments with his students. There was flexibility to live. I thought it is really important thing to live happily. In Japan, most of people work hard but tend to forget what is the most important thing to live. We cannot buy the nature. We cannot live without the nature.

At the school, I found the interesting word for success. It was “getting along”. While I was in Kangaroo Island, I heard the words like “relationship” and “human bond” so many times. I realized people who live there are helping each



other. That is why they could be alone and grow up because people know we are not completely alone.

This study tour gave me a great chance to learn new things and I'm pretty sure that it was one of the best experiences in my entire life.



## What the Island of Kangaroos Gave Me



Undergraduate student, University of the Sacred Heart Tokyo  
Yuri Kyoda

About one month has passed since visiting the island of kangaroos, I have returned to daily busy life. The days spent on that island always crosses my mind during my classes at the university, while I and doing homework or at my part time job, and the bustling Tokyo. The peaceful time spent on the island of kangaroos had a bigger impact to me then I had expected. After returning to Japan, the vast nature brands itself more into my mind as time passes by. Although memories always fade, however pleasant it was, whether I go to a distant country, this time, the memories are clear like a photograph. My knowledge is still shallow about sustainability. Without having a clear idea about sustainability, I participated in this tour with an unsure feeling. And when I went and saw the actual scenery and met the people, it made the little curiosity in me grow.

Although there are many things that I would like to talk about, there are three scenes that are still very clear today. First is Teasdale's eco-house. This is the first time that I have felt that I wanted to see and learn more after seeing homes that are built like this. When I hear "eco-house", I imagine it hard to live in and rather inferior to the normal comfortable lifestyle. If a home was built just thinking about sustainability, it may have been so; however, their home had incorporated beauty in it. I was shocked by its concept and charmed by the beauty of the eco-house. The second memory is the rainbow seen from the art room. The weather at the island of Kangaroos changes often, and rainbows are often seen in the sky. The rainbow seen from the hill, the rainbow which begins from the great marine horizon, and the rainbow seen from an unexpected room. The indoor and outdoor scenes became unified and felt very free. Native things were used often and the



features of the island were projected into the interior design of the homes. Maybe it is because I have never seen it in Japan, the rainbow made from sunlight and a shard of glass touched my heart. Foreign species of trees were lined up and planted, and there were dead birds on the ground that had probably died from stopping onto an electric wire. It hurt me to think that the nature is being destroyed by the actions of NEC. What I understand from these three things are very simple. By using the products from the area and incorporating the scenery into the eco-home, it is connected with sustainability, and by using foreign things, something will be lost as the compensation. However, it was a very big deal for me to be able to see, hear, feel and think slowly with all five senses.

I experienced many things which was so impressed by using all five senses during this tour. I saw two kangaroos and beautiful setting sun in the nature that there are nobody as far as I can see, beautiful beaches, and the jump of the dolphin to see from a boat are wonderful so my feeling is beyond expression. I got to know and shocked the difference between people who tried to protect all the nature of the island living in there and my living place. However I think that there were also many things which were able to be noticed because I was born in Japan and living in Tokyo now. Moreover, although it may be impossible to be realized that what are the kangaroo island people doing right now to protect the nature them perfectly in all countries, if we getting to know a lot of information about local and try to develop its strong points, and have interests and prides, I think that it will lead to build the sustainability society. I would like to connect to the future all I learned that studied during this tour.

Thank you for giving me the opportunity to think about sustainability and many other things.



## Learning in the time which cannot be timed



Undergraduate student, University of the Sacred Heart Tokyo  
Emi Fujimoto

“Such a beautiful world is located beyond the sea from Japan?! ” I was really surprised. Probably, Kangaroo Island will be a sustainable world, even if the generation has changed. I felt it strong when I visited to Bob and Jenny’s house and Kingscote School Campus (KSC).

The Bob and Jenny’s house; energy, water, beauty and nature, all the balance were maintained and sustainability was implemented in a visible manner. In addition, there was no awkwardness in their life. Bob and Jenny who live in the house have kept a natural posture and enjoy their sustainable life. Beside, “good life” considered in Japan is that riding a foreign car, eating high-grade dish, having a large house and wearing brand clothes. However, I realized that Bob and Jenny are living in a “good life,” in the true meaning for which people satisfied in their heart. I was able to rethink my daily life in Japan.

In KSC, there are three education philosophies; telling the Aborigine culture, including sustainability to the curriculum, making conscious that Australian is a member of Asia. Firstly, telling the Aborigine culture. Aborigine culture is one of the important histories in Australia and students can learn much from that history. Moreover, learning the history enhances historical and cultural conservation. Secondly, including sustainability to the curriculum. One of the examples, there is a food waste composter in the schoolyard. Students gather the garbage and take it into the compost. That garbage become fertilizer and student use it for growing crops. Through this effort, students can learn food cycle and chain to our life. In other words, students experiences connection with others and realize that people cannot live alone. Lastly, making conscious that Australian is a member of Asia.



When we entered school, we found handy crafts in the motif of Japanese apricot. In addition, one of the classrooms was decorated like Asian-style. However, Japanese believe that they are a part of Asia continent, but do not strongly consider that we are Asian. Also, Japanese education do not regard strongly that we are a member of Asia. KSC students can look abroad, since they are child and it is directly related to an ability to have a wider view.

Relation of island people was also impressive. On the conference, everyone considered the future of the island earnestly. They are cooperated and respect each other. All people we met in the island, were proud and love their island.

During my stay in Kangaroo Island, I was in the sustainable world. Everything that I learn was absorbed and accumulated. I could spend precious time.



## Questionnaire result

### 1. What is the most important “Sustainability” that you met in Kangaroo Island?

- Bonds of the community
- Relationships among people in communities are reflected in activities.
- Vocational training
- Education for learning life skills
- Land with freedom
- Respect

### 2. What is the most impressive thing for you in the tour?

- Qualitative time and space at Eco-House
- Comfortable feelings at school
- High consciousness of islanders for environment and their collaboration
- Strong and Clear wind from Antarctica
- The smiling faces of a student who is autism.
- The time spent by myself in nature
- The great nature that I felt with five senses
- The Eco-House which maintained all the balances; energy, water, beauty, and nature.

### 3. If you have met anything that you did not know in this tour, please write it.

- It is important to maintain thoughtfulness to others.
- Severity and beauty of the nature of the Island
- We live in various relationships; people to people, people to society and the chain of the life.
- The wild animals did not much to fear from us.
- A true “luxury” life can be led even if we lead an ecology-oriented life
- There are so many things that we have to learn in the world.
- There are many buildings with good functionality, consideration for environment and beauty compared to Japan.
- People can not live without nature.



- Respect to the others fosters and create good atmosphere at school
- It is important to learn with five senses.

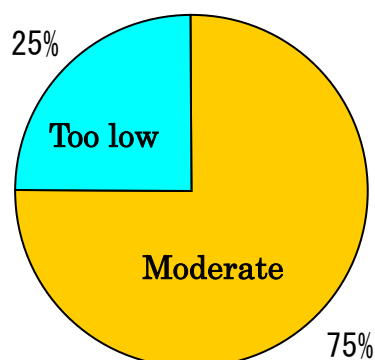
#### 4. Do you find any issues or challenges to improve the study program?

- We need more free time.
- It is pity that not many teachers participated.
- Schedule on a day was tight and we tended to suffer from flood of information.
- We could not plant seeds at *Asuno-Mori*.
- I think that I need more English skills. If I speak English well, I could ask more pointed questions. And, I should have study more before I went to the Island.
- We need more time to be alone for enriching understanding of learning
- I wanted more time in which I can ask questions to teachers and graduate students from students.
- I wanted to have more discussion with Japanese members.
- I wanted to interchange with local students.
- We should have done the preparation for the presentation, but we had depended on teachers.
- I need more information about weather conditions in Kangaroo Island.
- I wanted to receive e-mail information about equipment for this tour more earlier.
- I thought without exporting canola oil to Japan, and making biodiesel fuel from it, sustainability of the Island would advance more.

#### 5. How do you feel about the participants of the Study Programme fees? Please choose one number.

- ① Too expensive
- ② Moderate
- ③ Too low

Result: The entrance fees





**6. What do you think about sustainability?**

- We should talk of what we need to sustain and cherish it.
- Don't act contrary to nature, and live in accord with the things around us.
- We continue asking ourselves and having dialogues with other people about how we human beings should be in the earth.
- We do not forget that this world is not only for the human beings, but for all living things.
- We live with all things that we can see.
- Ability for us to think flexibly and take action, not to think one way.
- Respect to others and myself.
- Do our best in our own environment.

**7. You went many places and experienced a lot. How much are you satisfied with these places? Please choose the degree of satisfaction.**

- ① Adelaide City sightseeing
- ② KINRMB Conference
- ③ Mr. and Mrs. Teasdale's Eco-House
- ④ Koala sanctuary
- ⑤ Remarkable rock
- ⑥ Seals at Admiral Arc and Seal Bay
- ⑦ Kingscote School Campus
- ⑧ Parndana School Campus
- ⑨ Winery
- ⑩ Dolphin watch
- ⑪ Drama by the students
- ⑫ Farm visiting
- ⑬ Film Evening with local people
- ⑭ Seeds Bank
- ⑮ State Emergency Services and Country Fire Service
- ⑯ Fine Art Kangaroo Island
- ⑰ "Japanese Evening"



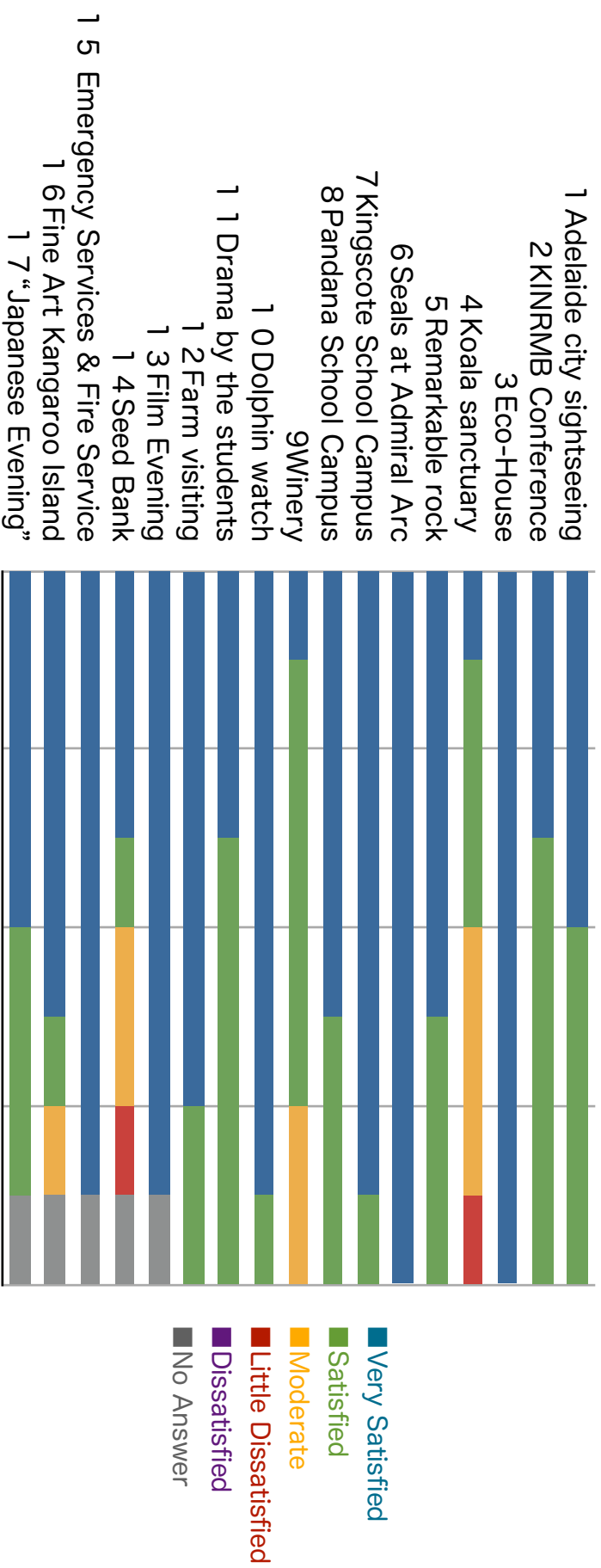


Figure1. How much participants satisfied with individual programme



Figure2. How much participants satisfied with entire programme



持続可能な食と農・エネルギー・教育を学ぶESDスタディーツアー報告書

2013 年 1 月発行


聖心女子大学文学部教育学科 永田研究室

〒150-8938 東京都渋谷区広尾 4-3-1

TEL: 03-3407-5914

FAX: 03-5485-3526





2012年度ESDスタディツアー実行委員会  
日本国際理解教育学会・聖心女子大学永田佳之研究室